

388-186



1200601311104



始





文學博士 和田萬吉編

江戸時代笑話選



388

186



I 種

W



1200601311104

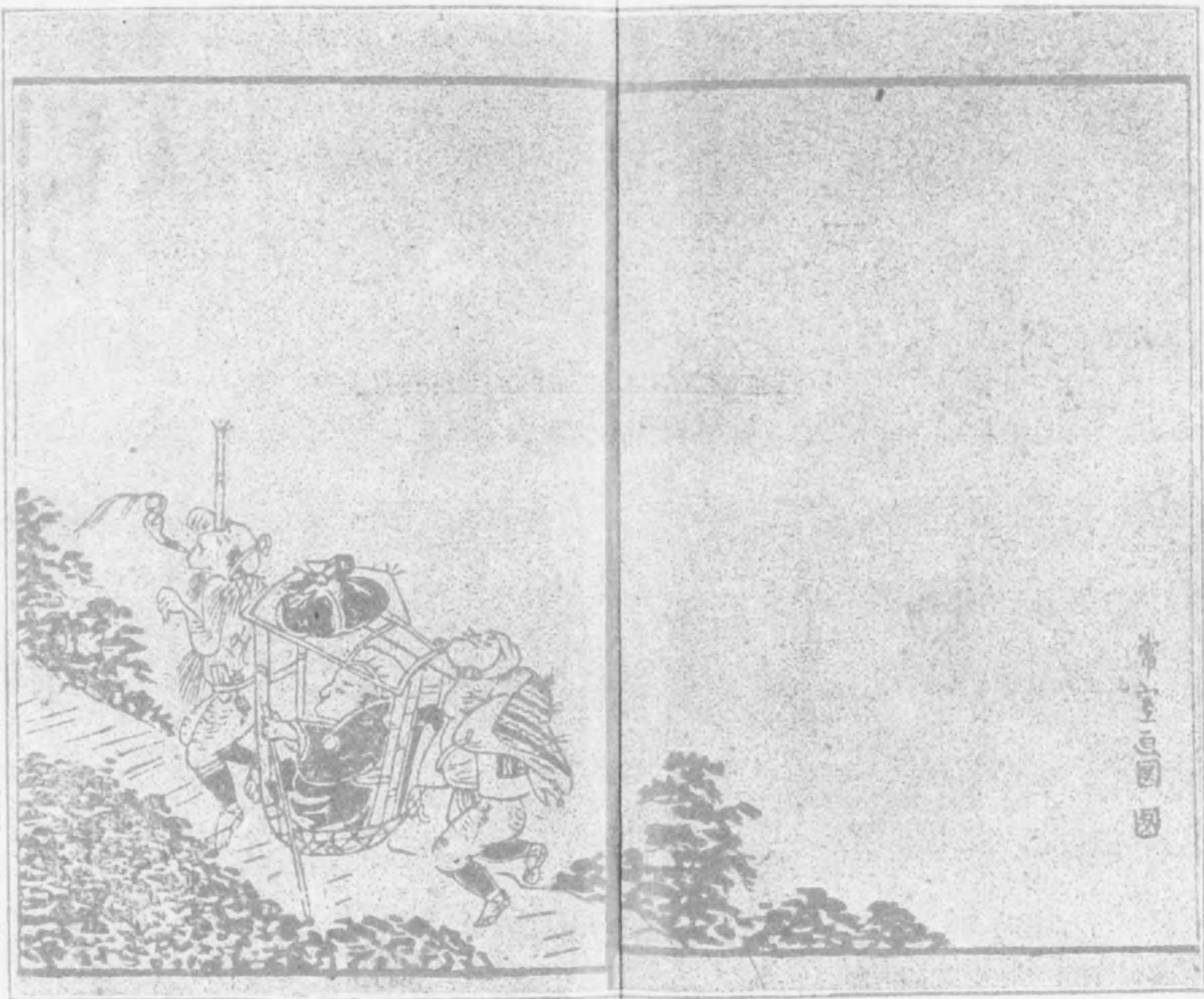
亭主 (聞上手)



馬嫌 (氣の薬)



神皇正統記



金澤 (飛談語)

序と例言を兼ねた詞

喜劇の最も單純なもので而も自然的興味に富むものは往々諧謔なる小話の形に於てあらはされる。此等の笑話は其形體こそ眇たるものであるが、其文學的價値は比較的に大なるものがあるやうである。

笑話の中には何によらず或一時の可笑の事件を捉へたものと稍深刻なる諷刺を寓したものと二種ある。前者に於ては概ね作者の觀察に奇警の分子があり、後者に於ては主題其ものに可笑の素質が存するので、兩者の間に自ら主觀客觀の差別が存するのではあるが、孰れにしても説話の道程が短くて直に團圓に到着するを本意とするものであるから、無理な誇張や無駄な挿入物をするを許されぬ處に作者心匠の妙を要するのは彼此同じことである。

我國に笑話の在るのは古いことであるが、其最も發達したのは江戸時代で、

序 (2)

其中でも安永天明から寛政享和に亘る三十年許りが極盛期である。此時期には滑稽文學として一方の雄たる川柳の勃興があり、其他黄表紙、蒔菫本等の流行もあつて、我文學界は縦横に大江戸の滑稽諷刺趣味を開發した。是より先元祿の文學隆興期にも笑話の流行は随分盛であつたものではあるが、其書籍として著れたものの多數は京阪の所産であつて、話材には猥雜のものが多く、行文には上方調子の生温く重くろしい嫌があるを免れなかつた。殊に題材は天明前後の江戸産のやうに多方面に涉らなかつたのは、地利の相違に因ることと思はれる。要するに所謂百萬石も肩辭も摺違ふ混雜至極の大都會が笑話の材料を供給するに適し、又寸鐵殺人的の語氣口調を有つた江戸者が之を書きあらはすに打つてつけであつたことは言ふ迄も無からう。

但し天明前後の笑話は元來市井文士の遊戯文字であつて、作者自身も晏然俗中の俗人を以て居り、敢て其作品を中流以上の士君子等に見て貰はうなどと云ふ野心は毛頭有たなかつたのであるから、稍數多く出版された笑話の本は見る

序 (3)

から、不川意千萬のもので、文字も印刷も粗笨不整、文章も宛字や誤脱で満たされて居る。それに著者たる人は概ねたわいも無い戯名を署して、今日からは其實名本貫を知るに由も無いのである。併し此等の本も年所を経ること久しい間に追々亡び行くばかりで、今では稀觀の部類に入らうとしつゝ、あるものも少くない。而も外形がみすばらしいと云ふよりは寧ろ内容のはかないものと云ふ廉で、古書複製の盛行する今の時にも多く顧みられぬ姿である。たまく、他の著述で高名な馬、三馬、一九などの筆にかゝつた笑話は其全集などの中に覆刊の運を見たのもあるが、此等知名の作者の笑話は型に入り過ぎて自然の妙趣に乏しく、甚だしきは(殊に一九の如き)こそぐりを主として拙惡陋劣、讀者をして案外の感をなさしめるのが少くないのみならず、往々前行無名者の述作を剽竊したのさへある。蓋し此等は著作を以て生業とする爲に多作濫製を敢てした輩の通弊であらう。要するに知名の戯作者の作つた笑話には採るべきものが少く、却て無名者の所著に一讀拍案のものが多いは事實である。余は後者に屬

序 (4)

する冊子數十部の中から風紀上斥責すべき難の無い小話三百餘則を拔萃して此一冊を編することとした。

抑々笑話は一概に何の重みも無い物として斥けてしまへばそれ迄であるが、一種洞見的の眼を以てすると、凡そ世態の裏面人情の機微皆此に窺はれぬものは無からうと思はれる程に、多方面に亘つて事物の切實なる觀察や深刻なる批評を試みたもので、此點に於て往々文學の他の種類の爲し能はざる所を爲すことがあつたのは慥である。

世間には催笑と云ふ事を一の不良事の如く心得て居る人もあるやうに見受けるが、解頤の間に自省の資を得又他を誨へる料をも得るとすれば、催笑は決して罪惡に非ざるのみか、寧ろ修養勸善の一方便たるを失はぬのである。西哲の謂ふ如くウィットありユーモアあることに依つて人間の生活が自餘群類のそさに超越したものになるとすれば、其ウィットの閃きを見せる笑話は人生自然の産物と認められねばならぬ。而して此自然の産物が餘りに機械的に且餘りに單

調に流れようとする今の吾人の日常生活に一種のレフレッシュメントを與へることとは、本書の編者が庶幾ふ所である。又僅々數行の説話の裡に當時の風俗習慣の片影を捉へる事が出来れば、それも此小冊の妙用と謂ふべきであらう。

本編に採收した小話の原本は、次に來る『抄出諧話本目錄』に示してある通り書名の明なもの三十五部並に書名の不明なもの凡十部である。此四十五部許りの所收小話の全數は無慮千五六百に上つて居る。其中から僅々三百餘則を採擇し得たに過ぎぬのは、原本の説話の大部分が平凡見るに足らぬと云ふ事實に因るに非ずして、寧ろ現代の讀者の品位に適應せぬ題材が多い故である。されば話材の健全なもの或は少くとも罪の無いものと云へば、多分本編の三百餘則に盡されて居ることと信する。笑話の特別研究をしようとする人は別として、一般の讀者は本編によつて此種の文學の大様を見るのが最も安全であらう。尙前記四十五部許りの外に編者の寓目した本は四十部程あつたが、其等からは一も採らなかつた。

序 (5)

前に書名の不明なもの凡十部と挙げたが、書名の知れぬと云ふのは少々異様に聞えるやうである。處が今日に傳存する本の中には、明に版式も違ひ張數附も違つて居る數種の刊本を各一部分無造作に綴合せて一部の完本の如く見せた本が少くない。此等は委しく穿鑿して、本編に採收した小話の存する其部分の原書名を明にせねばならぬ筈であるが、此種の本の通例として毎張の版心(柱)に略標題も刻記されて居らぬ故に、該當部分の原書名を突留めかねる。仍て相當に努めても原完本を求め得なかつた場合には、止むを得ず前述の如き綴合本を姑く逸題名として取扱つたのである。但し此等の綴合本の中には後年の書肆のさかしらに成つたものも有り、又所藏者の手で數種の殘闕本を合装したものも有る。

又書名の明な完本どしの間にも其内容の取り遣りは澤山にあつて、前行の甲本に載つて居る二三小話が其儘又は少し許り變更されて後行の乙本丙本等に再出して居ることが少くない。此は明に一方が剽竊したのであるが、當時別段に

其等の咎立をする者も無かつたらしく、其邊すべて埒も無いのである。此等の場合には成るべく刊行年代の早い本に存するものを探ることにしたが、後年の本に出て居る方が面白く作られてあるものに限つては必ずしもさうはせぬ。甲乙二本の刊行の前後が判らぬ場合にも同じ手段を執つた。

小話の題目は原本に存する通り探つて、それが果して説話の内容に適實であるか無いかを問はぬことにした。併し多數の本から會萃の結果、話題の偶然同一のものも少しは有つた。此等は原則としてはやはり原の儘にしたが、本書の編次上彼此を區別する必要又は便利を認めるときは、聊か其一を變更したのもある。各小話の終りの抄出原書名の上に特に改題した趣を註して置いたのが即ちそれである。

小話中に出て來る人物の階級や職業や又氣分を最も適確にあらはすものは其眞の口から出る言語であらねばならぬ。随つて用語の雅俗純訛を一定することは笑話に於ては殆ど全く不可能である。本編に鄙俚の語の交つて居るのは寫生

序 (8)

の文として當然であることを断つて置く。

大正八年十一月

編者識す

抄出小話本目録

序 (9)

飛談語	安永二年刊	(九則)
口拍子	安永二年刊	(七則)
千里の翅	安永二年刊	(五則)
俗今歳花時	安永二年刊	(八則)
仕方咄 初編	刊年不詳	(七則)
仕方咄 三編	春みやけ 安永三年刊	(四則)
茶の子餅	安永三年刊	(二十九則)
いちのもり	安永四年刊	(十六則)
落嘶鳥の町	安永五年刊	(十四則)
高笑ひ	安永五年刊	(九則)
<hr/>		
春俗	安永六年刊	(十則)
鯛の味噌津	安永八年刊	(六則)
氣の藥	安永八年刊	(二十五則)
壽々葉羅井	安永八年刊	(六則)
いかのぼり	安永十年刊	(二則)
即席料理	天明元年刊	(二則)
養艸	天明二年刊	(一則)
富久喜多留	天明二年刊	(十三則)
話問内	天明二年刊	(九則)
猫に小判	刊年不詳	(三則)

序 (10)

聞上手 刊年不詳	(二十三則)
笑長者 刊年不詳	(六則)
落話花之家抄 刊年不詳	(七則)
駿河茄子 刊年不詳	(四則)
うくひす笛 刊年不詳	(一則)
しんの郭壽賀書 刊年不詳	(四則)
はなしの郭壽賀書 刊年不詳	(一則)
振鷲亭嘶日記 刊年不詳	(三則)
春の駒 寛政八年刊	(八則)
くゝり猿 寛政八年刊	(三則)
獨樂新話 刊年不詳	(一則)
山笑顔 刊年不詳	(五則)
ちかひのまん中 刊年不詳	(六則)
みになる金 文化六年刊	

太郎花 刊年不詳	(二則)
嘶の安賣 文政九年刊	(八則)
逸名小話本凡十部	(四十四則)

目次

1	豆島……………二	山出し……………三
	鯛の炙物……………三	海膽……………四
	疊替……………四	風呂……………五
	遠矢……………五	代脉……………六
	車曳……………六	流行醫者……………七
	田舎者……………七	庵相……………八
	遠眼鏡……………八	仲人……………九
	お目見え……………九	藪醫者其一……………一〇
	泉水……………九	藪醫者其二……………二〇
	名鳥……………一〇	急病……………二二
	雇の供……………一三	井戸掘……………三三

大屋……………二四
 自身番……………二四
 藝荷其一……………二六
 藝荷其二……………二六
 梵論……………二七
 末世……………二六
 道心坊……………二九
 室咲……………三〇
 人相見……………三三
 占……………三三
 歳の市……………三三
 貧福……………三四
 目出度……………三五

七寶……………三五
 神木……………三六
 地獄……………三七
 鉢木其一……………三七
 鉢木其二……………三六
 高砂……………三九
 かね……………四〇
 婚禮……………四一
 謠……………四二
 樂……………四三
 禁酒……………四四
 酒……………四四
 大酒……………四五

生醉……………四四
 酒好……………四四
 軒……………四七
 大下戸……………四八
 頭痛……………四九
 將棊……………五〇
 知らぬどうし……………五一
 香爐……………五二
 小鼓……………五三
 革……………五四
 義太夫……………五五
 師匠……………五五
 東坡……………五五

庵室……………五七
 茶の湯……………五八
 茶……………五九
 煙草……………五九
 葉たばこ……………五九
 菘……………六一
 料理茶屋……………六一
 料理人……………六二
 俄客……………六三
 榮螺其一……………六四
 榮螺其二……………六四
 きらず汁……………六五
 飯焚……………六六

貝杓子……………六六
 猫も杓子も……………六七
 茶粥……………六八
 惠方参……………六九
 吝坊……………七〇
 印籠……………七一
 放蕩子息……………七二
 吝畜いやつ其一……………七三
 吝畜いやつ其二……………七三
 鸚鵡……………七四
 珊瑚珠……………七五
 二度の断……………七六
 貝焼……………七七

隠居……………七八
 始末……………七九
 熊……………八〇
 頓死……………八一
 忌中……………八二
 宗論……………八三
 讓金……………八四
 人玉……………八五
 關羽……………八六
 返魂香……………八七
 悔み……………八八
 遺言……………八九
 お迎ひ……………九〇

葬禮……………九一
 江戸……………九二
 年代記……………九三
 榎木……………九四
 据風呂……………九五
 駿河の客……………九六
 間違……………九七
 買出し……………九八
 潮煮……………九九
 練馬……………一〇〇
 盗人……………一〇一
 貧家……………一〇二
 臆病……………一〇三

八兵衛……………一〇四
 釜盗人……………一〇五
 茶の間……………一〇六
 葛籠其一……………一〇七
 葛籠其二……………一〇八
 戸板……………一〇九
 貧乏人……………一一〇
 走る名人……………一一一
 水……………一一二
 大石……………一一三
 貸店……………一一四
 古道具屋……………一一五
 柱隠し……………一一六

鐵砲	一〇八
びいどろ	一〇九
硝子	一一〇
毛抜	一一一
傘	一一三
下駄	一一三
龜相者	一一四
髪結床	一一四
髪結	一一五
嫁姑	一一六
銅の鳥居	一一七
早約束	一一八
梅が枝	一二八
水打	一一九
雷	一二〇
戸棚	一二〇
大黒	一二一
借錢乞	一二三
不禮講	一二三
己惚	一二三
いかのぼり	一二四
石橋	一二五
見えばう	一二六
羽織	一二七
立聞	一二八
豆腐	一二九

田舎女	一二九
役者	一三〇
役者の女房	一三三
業平	一三三
長羽織	一三三
異見	一三三
檢校	一三四
音の字	一三五
風	一三六
合羽	一三六
伊勢物語	一三七
年忌	一三八
兄弟	一三八
思案	一三九
教訓	一三九
坊主	一四一
火いぢり	一四一
世話好	一四二
蒲焼其一	一四三
蒲焼其二	一四四
拾物	一四五
むきみ	一四六
鴨其一	一四六
鴨其二	一四七
葬	一四七
菜島	一四九

若菜……………一五〇
 菜賣……………一五〇
 山椒……………一五一
 釣其一……………一五二
 釣其二……………一五三
 釣其三……………一五四
 鼠其一……………一五五
 鼠其二……………一五五
 聲色……………一五六
 木兎……………一五七
 土龍……………一五八
 狼其一……………一五九
 狼其二……………一六〇
 百物語……………一六一
 化物屋敷……………一六二
 饅頭……………一六二
 節分……………一六三
 どもり……………一六四
 聲の樂……………一六四
 寒聲……………一六五
 鶏……………一六六
 つんば……………一六六
 日待……………一六七
 梟……………一六八
 座頭其一……………一六八
 座頭其二……………一六九

眼の玉……………一七〇
 芝居……………一七一
 近眼……………一七一
 開帳……………一七二
 観音其一……………一七二
 観音其二……………一七三
 大佛其一……………一七四
 大佛其二……………一七五
 大佛其三……………一七六
 仁王……………一七七
 仙人其一……………一七八
 仙人其二……………一七九
 十徳……………一八〇
 八艘飛……………一八一
 鶴……………一八二
 梵妻……………一八三
 小僧……………一八四
 味噌……………一八五
 こぶし……………一八六
 ぶしやう親父……………一八六
 無性……………一八七
 金澤……………一八八
 駕籠……………一八九
 安物……………一九〇
 四萬六千日……………一九二
 都鳥……………一九三

大八車	一九四	厄拂ひ	二〇三
新參	一九五	重箱	二〇三
芝居くづれ	一九五	禮者	二〇四
途中	一九六	箒	二〇五
打擲	一九七	道樂者	二〇六
律義	一九八	雷嫌ひ	二〇七
香の物	一九八	薦先生	二〇八
綿屑	一九九	婚禮ぶるまひ	二〇九
丁厨其一	二〇〇	敦盛	二一〇
丁厨其二	二〇〇	仕事師	二一一
行燈	二〇一	高の者	二一一
簞	二〇一	移徙	二一一
五匁五分	二〇一	雷嫌ひの家	二一一

土藏の腰巻	二二二	火の見其一	二二三
紙帳	二二四	火の見其二	二二四
吊棚	二二五	途中	二二五
立合	二二五	凧	二二五
相撲	二二七	宿無し其一	二二七
釋迦が嶽	二二七	宿無し其二	二二八
豆腐屋	二二八	薦かぶり	二二八
ど忘れ	二二九	錦	二二九
記憶	二二九	天秤	二三〇
七ころび	二三〇	無宿の帳	二三〇
焙烙	二三〇	滴酒	二三二
鍋屋	二三二	甘酒	二三三
木綿屋	二三二	鑓持	二三三
井戸掘	二三三	馬嫌ひ	二三四

落馬	二三五
悪い癖	二三八
亭主	二三七
湯屋の喧嘩	二三八
編笠	二三九
臆病武士	二四〇
井戸替	二四二
綱右衛門	二四二
せんぼう	二四三
人蔘	二四四
切腹	二四五
浪人其一	二四五
浪人其二	二四六
劍術	二四七

黒人	二四五
柔術	二五〇
新身	二五〇
拔身	二五一
武勇	二五二
手紙	二五三
砂糖	二五三
金	二五四
一の富	二五四
眼鏡	二五五
富士山	二五六
唐の雀	二五七
底拔	二五七
つづみ	二五八
爺と婆	二五九

江戸時代笑話選

豆 畠

殿様、用人どもに『内々で申付ける事があるが、邸では言はれぬ。船に乗つて品川沖へ出よう。』と仰出され、早速其用意して品川の沖へ漕出せば、殿様仰せには『下邸へ豆を蒔かうと思ふ。』用人衆呆れて『此くらゐな事ならば、御邸で仰付けられても可ささうなものと存じます。』といへば、『はて、莫迦を言ふな。鳩が聞くはえ。』(「獨樂新話」)

* 大名旗本などの家で庶務を掌る役人。

鯛の炙物

『お朝御膳は鯛で無くては濟まぬ。何程の不漁でも一枚は有りさうなもの。』

『やう／＼一枚出来ました。もう千兩出しても鯛はござりませぬ。』

『まあ／＼御膳を上げろ。』

殿様機嫌よく召上られ、『炙物の替り持て。』

御近習無南三と立ちかねて居ると、殿様彼方向かせられた。そのうちに御近習ちやつと炙物を引くり覆して置いた。殿様又『炙物の替り持て。』との御意、御近習とむねをついてぐ／＼すれば、殿様『又彼方向か。』(「口拍子」)

* 大名の家職で主人の身邊に仕へる人。

疊替

疊替致すやうにとの仰付おほせつけ、それも汚れざるは其儘そのまゝにさし置けとの御意、家老「お疊ぬきく取替へましては石疊いしだみのやうで見苦みぐるしうござりませう。

殿「そんなら汚れたるは裏返うらがへしたが可よい。

家老「武士ぶしの家に裏返ると申す事は嫌きらひまする。

殿「其疊そのたみは如何程いかほどある。

家老「凡およそ八百疊程はつひやくだみほどござります。

殿「千疊せんだみに及およばねば裏返るとも苦くるしうない。

〔富久喜多留〕

遠矢

「今日は品川沖しながはのきへ遠矢とほやを射いに行く善はず。よい處ところへ來きやつた。なんと、見物けんぶつに行きやらぬか。」とあれば、出入でいりの町人ちやうにん「それは有難ありがたうござります。お供とも仕つかまつりしたい。」と、同船どうせんにて沖おきへ乗出のりだし、殿とのは弓ゆみに矢番やつがへ、忘わする、ばかり引絞ひきしぼり、弦音つるおと高く切きつて放はなす。町人ちやうにん手てをつき、「初はじめて拜見はいけんいたしました。只今ただいまのお矢やは嘸さ遠とほく参まゐりましたでござりませう。」と申上まうしあぐれば、殿との「不便ふびんや、唐人たうじんを。」

〔氣の藥〕

車 曳

當世は慾の世の中。あたじけない車曳、米十俵車に積み、たつた一人で曳いて行き、江戸橋へ曳上げて見ても、如何な一人では動かさず、誰ぞ來たら押上げて貰はうと待つて居る處へ、跡から殿様のお通り。車曳汗を拭ひ、「すきと碌な奴は來ぬ。」

* 昔の橋は大抵中央で高くなるやう弧形を成して居て、橋身全體が前後の道路より多少高めに作られたものである。

** 「すき」とは「少しも」の如き意。

田 舎 者

田舎者始めてお江戸見物に出た。向の方からさるお大名のお通り。先を拂つて『下に居ろくくく。』『田舎者蹲踞ふ。』『高いくくく。』田舎者土に手をつく。『下あにくくく。』田舎者地へ頭を附ける。『高あいくくく。』田舎者下水へ這入る。『高あいくくく。』田舎者『もう是より低かあなり申さねえ。無理な事をいふお人様だもし。』お大名お通りが濟むと、下水から出ながら、『どん龜といふ身ぢや。(くゝり猿)』

* 「どん龜」は泥龜の訛稱で、池沼など泥深い處に棲む龜のこと。又龜を指すこともある。

遠眼鏡

「八や、遠眼鏡を見ようぢや無いか。」

「を、見やれ。」

「どれ、些と見てやらう。」

「御覽じませ。向うに見えるが淺草觀音、廣小路、なんと善う見えませうが。」

「ほんにとんだ事だ。八や、早く頬被を取りや。」

「何故。」

「今御三家様がお通りだ。」

* 御三家は徳川將軍家の一門、尾張、紀伊、水戸の三藩主。

お目見え

お國家老いかさま惣太夫どの、若殿へお目見え。お守役抱き申して居る處へ罷出で、きつと平伏して、「さてもお健なる若君さま、まことに御成長の程萬萬歳と恐悦に存じ奉ります。」と云ひながら、顔を舉げて「恐れながら、ばあー引。〔千里の翅〕」

泉水

番町から本所へ邸替した人の處へ見まひ、「是はく、善いお庭だの。」「されば御存じの通り、拙者數年の泉水すきでござつたが、番町では出来ませなんだ

に、久しい望で泉水を穿りました。』「なるほど、此邊は自由になる。扱も大きな泉水の。』と云へば、『段々深く、思入れ穿るつもりでござる。』と云ふ。其後又行きて見るに、家も長屋も残らず崩して邸一面に泉水にする。隣邸の門番に聞きければ、『あい、お隣家の檀那は榎の上にござります。』〔話問内〕

名 鳥

主人『明日の珍客に何ぞ新しい馳走の仕方はあるまいか。才覺致せ。』

用人『至極珍しい御馳走がござりまする。』

主人『何がある。』

用人『昨日鳥屋の前を通りましたが、尤も小鳥にて三味線の音を啼きまする。』

主人『それは至極ぢや、買へ。』

用人『金百兩ぢやと申しまする。』

主人『百兩でも好い、買つて来い。』

諸客の前へ飾り、『此鳥の音を今にお聞きなされ。』と、亭主自慢貌にて披露したれども、終日啼かず。客も氣の毒ながら『又かさねて参り承らう。』と云うて歸られた。主人用人を呼付け、『其方此鳥は三味線の音を啼くと云うて、我に買はせ、客の前へ出させたれど、終日少しも啼かず。さすれば入用にも無し。即ち其方へ取らする。』と、苦々しき顔にて投出す。用人あやまり入りたる風情にて、鳥籠をお次へ持出で、鳥に向つて怨みけるは、『最前鳥屋にある内は、汝随分三味線を啼きけるに、今日お客の晴の場にて啼かざるは如何なる事

ぞ。主君に大金を出させまし、御馳走も無になるのみならず、全く私慾に主君を欺くとの御意も同じき御顔色、今さら申譯には、我等切腹するまでなり。鳥類に向ひ無益の怨ながら、あまりにつれ無きふるまひかな。よくく武運にも盡果てたなあ。」と云ふ身振。鳥「てゝてん、つゝてちちん。(「飛談語」)

雇の供

獨者の醫者あり。さる町家から呼びに來れば、是は思ひも寄らぬ良い鳥が取れたと悦び、一張羅を出して見えを作り、一人では行かれまいと、相店の長八を慮外ながらと草履取に頼み、召連れて出でけるが、長八が形のあまり見苦しきに迷惑し、「これく長八、貴公の形は餘り見ともない。なんと案じはあるまい

か。」といへば、長八暫く工夫して、腰の手拭を取つて頼冠をして、「是で好い。さあござれ。」といふ。醫者之を見て、「まあ、その頼冠はどうだ。」はて、是でお前の供とは見えませぬ。

山出し

醫者家來を呼び、「そちは此頃江戸へ出たばかりなれば、知らぬは尤もぢやが、物まうといふ時、何處からござつたと云ふものでは無い。どうれと云ふものぢや。」と言付けければ、「かしこまりました。」と云ふ處へ、「頼みませう。」といふ。「何處からござつた。」といふ故、「たつた今言付けた事をもう忘れたか。何故どうれと云はぬ。」と吐れば、「それでもあれは頼みませうと申しました。」

『いやさ、頼みませうも物まうと同じ事ぢや。さう心得たが可い。』『あい、かしこまりました。』と云ふ。又裏口の障子を開けて、『三角吟庵さまは此方でござりますか。』『なる程、此方でござる。』『そんならお頼み申します。』『どうれ。』

(「いちのもり」)

海 膽

或醫者どのへ見廻ひけるに、『是はく善うこそ。』と座敷へ通し、盃を出し馳走しけるが、肴に越前の海膽を出しければ、

『もし、是は何でござりますの。』

『海膽でござる。』

『はて、結構なお肴でござります。風味と申し、お珍しい。』

『さればさ、やうく貰ひました。時に此角はきつい毒消しさ。』

* 海膽(うに)を一角(うにこ)と混同して居るのである。一角の角(實は牙)は漢方で解毒劑として用ゐた。

風 呂

醫者錢湯へ行き、風呂の内にて近付の者聲を掛け、『今日は遅くお出なされました。』『いや、今日は大路、四谷から赤坂、麴町、谷町、原町、權田原を廻りました。』『それはお草臥でござりませう。』と云ふ内に、又隅の方で、『今日は途方も無い道を歩いた。聞きやれ、四谷、赤坂、麴町、谷町、原町、權田

原。』と云ふを聞いて、俺が口真似をする悪い奴と透し見れば、薬箱もち。

〔茶の子餅〕

昔の醫者は藥劑を容れた箱を供の男に持たせて病家廻りをした。

代 脉

さる流行醫者の處へ、夜更けてわきから病用をいうて来る。『押付これから。』と使を歸し、『今夜は雨は降る、いかう寒い。俺は不快ぢやというて、此方名代に行つてくりやれ。』と内弟子を駕籠に乗せてやる。眠けれど師匠の言付、是非なく駕籠にのりて、ふらく眠りながら行く。病家の門口に駕籠を下して駕籠昇が『頼みませう〜。』といへば、かの弟子ふつと目をさまし、駕籠の内

から『どつれ。』〔聞上手〕

流行 醫 者

さる處に名醫あり。活藥師ともてはやして、駕籠に乗つて飛歩行く。夜は五度六度づつ迎が來てつれて行く。朝も七つ時分から起きねば、調合の間が合はず。このやうに忙しくては續かぬ。どうぞ流行り止む工夫もがなと色々案じて、不景氣に見せんと先づ駕籠を止めて徒歩で歩行く。それでも流行る。これではいかぬと供を減して一僕つれて歩行く。それでも流行る。後には供をも止めて身の廻り見苦しく見せて、只一人歩行く。それでも流行る。どうしてもかうしても流行る故、『いやはや、是ではならぬ。』と、とうぐかけ落。〔聞上手〕

* 今の午前四時。

龜相

急病家へ行くとして脇指と思つて榎木を指して。行く病用相済み、病家にて榎木を見て、『さてもお前は龜相千萬、取違へる物こそござらうに、脇差と榎木とは。』と笑へば、憎き女房め、かやうなる事を氣を付くべき事なるに叱らんと、暇をもそこく眞一文字に走歸り、我家を取違へ隣家の内へ這入り、内儀の縫物して居る處を、『おのれ憎い奴、脇指を取違へ指したるを知らぬ顔に見なし、満座の中にて恥を與へ 言語道斷不届者め。』と叱れば、『是はしたり、隣家さま何をおつしやります。』といふを見れば、隣家の内儀。『是は龜相。』

と我家へ飛んで歸り、女房が前に手を突き、『只今の不調法御免下されませ。』

〔茶の子餅〕

仲人

至つて不器量なる娘あり。とかく縁遠くて親たちも困り居けるが、或時心易くなされて下さる鯛庵老のお出。四方山の話も濟みて、亭主鯛庵老に向ひ、『御存じの娘が事、年ごろにもなりますれど、未だ相應な處もござりませぬ。お前様は方々廣うおあるきなされますれば、お聞合せなされて下さりませい。』といへば、鯛庵どのも是には困り、『なる程心得ました。病家其外方々へも參れば、随分と心がけませうが、又餘人にもお頼みなされい。』

難治又は回復の望の無い病人に就いて云ふ當時の醫者の常用語が出たのである。

藪 醫 者 其 一

ある人名醫を尋ねて療治を頼まんと、名高き醫者といふには残らず尋行きて見るに、どの醫者の女關にも二十人三十人或は五十人六十人づ、幽霊が居て、『此醫者故に非業の死を遂げしことの怨めしや。』と叫く。此人膽を潰し、さてく醫者には上手の無いものと見える。是は何でも幽霊の少い程が名醫ならんと、處々方々の醫者を尋ねれども、ちつとかそつと幽霊の居ぬといふは無く、せん方つきたる處に、とある新道に怪しけなる竹の打付格子をしつらへし醫者

あり。此醫者の門口にばかりはたつた一人の幽霊が居る。かの男これこそ誠の名醫なるべし。一人ぐらゐるは違ひも有りさうなもの、廣き世の中になつた一人の幽霊の居るはこゝばかりと感心して、案内を請はんとしけるに、かの幽霊此男の袖を控へて、『もし、およしなせえ。此醫者は昨日から始めて、昨夕私は殺されました。』〔駿河茄子〕

藪 醫 者 其 二

急病とていそがはしく出て行く拍子に、隣家の子供を蹴飛ばす。隣家の噂飛んで出で、『此醫者さまは如何に急な病用ぢやとて、人の子を蹴飛ばすといふ事があるものか。』と大いさこさの中へ、大屋どの割りに這入り、『相借屋の事なれば

互たがひにふしようしたが良い。高たかが足あしで蹴けられたばかり。此この人ひとの手に掛かつて活いきた者は一人も無い。(「春傭」)

急きふ 病びやう

九ここのつ過すぎの寢ね入いばな。』とんくくく。』誰たれぢや。』伊い勢せ屋やから。御ご新しん造ぞうさまが癩しかくが引ひ付けて目めを取とりつめました。急きふにくく。』南なん無む三さん寶ぼう。』と羽は織かり引ひ掛かけ紐ひもそこくくに走かけて行ゆき、つ、と這はひ入いれば、家か内ないは上うへを下したへ。醫い者しゃどの寢ね起かきのうろたへ眼まなこで行ゆきなりに下げ女ぢよの手てを取とつて脈みやくを見みる。』あ、もうし、私わたくしではござりませぬ。』はて、こんな時ときに誰たれ彼かれの差しゃ別べつは無ないてや。(「今歳花時」)

* 今夜の十二時。

* 癩しかくが取とりつめて目めを引ひつけたの轉ま倒たで、周しう章ちやうの様ようをあらはして居ゐる。

井い 戸ど 掘ほり

『お家主いへぬしさまはお前まへでござりますか。表おもての二に間けん店だをお借かり申まうしたうござります。

』はい、そこ許もとの御ご商しやう賣ばいは。

』はい、井い戸ど掘ほりでござります。

』それではどうも貸かされませぬ。店みせがだい無なしになります。

』へえ、そりや又何またな故げでござります。

』大おほかた掘ほつて賣うりに出でるだらう。(「獨樂新話」)

大屋

貸店の札を子どもが悪戯にはがす。度々に及べば、大屋どの案じを付けて、厚板に貸店と書いて釘にて丈夫に打付け、『是なら二三年はこらへる。』

「鳥の町」

自身番

大家三四人自身番所に詰めて居る中に、一人の近付の醫者通りかゝり、『是は御番、御苦勞、いつも能くお勤めなされます。』『是は忝い御挨拶。私の番はちやうど貴所のお薬と同じ事でございます。』『とは何故に。』『はて能く廻り

ます。』『是はお口合、どうも言へませぬ。』と別れ行く。傍なる家主之を聞き、なんでも俺も言ひたいものと、豫て近付の醫者の通れかしと心掛けしが、或時近付の醫者いそがしさうに通るを、『もし、ちよつとお目にかゝりませう。』といへば、『只今は急病で参ります。』『いや、お手間は取らせませぬ。』『さやうならば早く仰聞けられませ。』『いや、外の儀でもござりませぬ。』『私がお前のお薬と同じ事。』『それが如何致しました。』『はて、能くあたります。』〔茶の子餅〕

* 藥に中るとは處方を過つたことで、醫者を喜ばせる挨拶では無い。

藁 荷 其 一

あはうなる庄屋藁荷を多年食ひしが、或時村の年寄どもを招き、「言渡すは別の儀でも無い。世間で藁荷を食へばあはうになると云ふが、俺は数年藁荷を食へどもあはうにならぬ。この通りを村中の者へ觸れて安堵させておくりやれ。

〔鳥の町〕

藁 荷 其 二

旅籠屋の女房亭主に向ひ、「今夜泊つた旅人の行李は餘程の物と見えます。どうぞ忘れて置けば好い。」といへば、亭主「を、好い工面がある。何でも無

性に藁荷を食はせて見よう。」と汁も菜も皆藁荷澤山に入れてふるまひけり。翌朝旅人は立つて行く。大かた落して行つたらうと、跡を見れども何も無し。「さてさて藁荷も利かなんだ。」といへば、亭主「いや、利いたく。」「そりや何を。」「を、さ、旅籠を忘れて拂はずに往にをつた。〔聞上手〕」

梵 論

虚無僧ある門に立つて尺八を吹く。内から「通れ。」虚無僧「然らば御免。」とづつと敷居を跨込む。亭主「これさ、通れと言ふのに。」虚無僧「然らば御免。」と、土下駄の儘にて勝手へ上る。亭主「はてさて、通らつしやれ。」虚無僧「然らば御免。」と座敷へ通る。亭主「此奴は氣違か。通りやがれく」

く。』と大音にていへば、虚無僧『然らば御免くく。』と裏口から出て行く。』(山笑顔)

* 虚無僧に報謝を出すことを拒む時は「御無用」と言ふが慣例であるのに、普通の乞食坊主などに對する如く「通れ」と言誤つたので、家の内に通つたのである。一般の物貫に對して「通れ」と言ふのは、門前を通過してしまへ」の義になる。

末世

乞食とも謂ふべき坊主門に立ち、「鉢々。」飯焚つかふど無く「通らしやれ。」と云へば、婆様聞いて、「これ三介、そのやうに慳貪に言はぬもの。此頃も聞け

ば、段々と人の氣が邪慳になるによつて、折々は弘法様があのような形で人を濟度にお歩行きなさるけな。随分氣を付けて物を言やれ。」といふ。坊主「さては露れたか。(「茶の子餅」)

* もぎだうにの意。

道心坊

表を道心坊が通るを見て、内儀「さてく汚い坊主ぢや。」といふ。主「滅多な事をいふな。弘法様だも知れぬ。」といふを聞き、坊主立止り、「南無三、顯れた。」といふ。主「さてもく太い坊主だ。弘法様だも知れぬというたりや、顯れたとぬかした。」といへば、坊主「又顯れた。(「高笑ひ」)

室 咲

染井の植木屋で節季候が福壽草や室の梅の鉢植に見とれて居るを亭主見て、
 「此方衆は鉢植が好きか。」といへば、「はい、私もも世に在る時は、是がき
 つい好きでござりました。」『いや、それは奇特な。苦しい。室へ這入つて
 見さつせえ。』『これは有難うござります。』と室へ這入る。亭主は之をさつば
 り忘れ、翌日の朝室の戸を明けて見たれば、内から萬歳が出た。〔獨樂新話〕

* 昔賤民が歳末に人の門に立つて「節季候」と祝つて錢を乞うたので、其
 者を亦「節季候」と呼ぶことになつた。

** 一夜明けて正月元日になつたので、前の節季候が年始向の萬歳の太夫

に變つて出たといふ洒落である。萬歳は賤民では無く、節季候とは全
 く別の者ではあるが、假に物貰といふ點に着想して同格の者の如く視
 た處にをかしみがある。

人 相 見

さる人、人相見の方へ行つて、「私の相を見て下され。」と百銅の包を出せ
 ば、相見つくふと顔を見て、「貴様は明日八つ時限の命ぢや。」と云へば、大
 きに驚き、早々内へ走戻り、明日限の命なれば何にも要らずと諸道具疊まで賣
 拂ひ、時計を買求めて、翌日早朝より時計を仕掛け、六つ五つ四つと九つ時
 も過ぎれば、もはや一時の命と目も離さず時計を見て居れば、程無く八つのかし

らをちやんと打つと、もう叶はぬと尻引からけて何處とも無く駈落。

〔壽々葉羅井〕

* 午後二時。

** 六ツは六時、五つは八時、四つは十時、こゝでは孰れも午前、九つは正午。

占

兩國の占見世の前で子ども凧を揚げながら、「爰の占者は中らぬ、下手だ。」と悪體を言ふ。占者腹を立て、「此奴らは毎日見世先で凧を揚げるさへあるに、憎い奴らだ。うぬらは何處から來居る。」「中て、見な。」〔鳥の町〕

歳の市

御幣かつぎの福右衛門、今日淺草の市だによつて、何ぞ買つて來ようと、火事も無いのに火事羽織股引といふ身で、山下から段々廣徳寺の門前へかかり、御門跡の甘酒などを啜つて、それから何ぞ買はうと思つてきよろつき眼で歩行く處が、どれもく、「負けたくく。」さあ負けたくく。」といふ故、例の御幣を起し、負けたとは縁起が悪いと、八つ時分から日の暮れるまで彼方此方尋ねて歩行く。されど、どれもく、「負けたくく。」とばかりいふ故、はて困つたものだ。折角來て何ぞ買はずは是も縁起が悪いと思つて見た處が、幸ひ其處に年も八十ばかりの親爺が大黒様を黙つて賣つて居る。さてこそ此奴は好い。己も

まだ福神は棄て給はぬと見えた。是こそ天の與ふる所と、「もしえ、其大黒様はいくらでござる。」といへば、かの親爺「これは百でござります。併しちつとは負けませう。」〔駿河茄子〕

貧 福

用有りて出掛ける向うから、心安い友だち來るゆゑ、「貧乏神、何處へ行く。」
 「を、わが家へ行く。」というて行過ぎる。はて忌々しい奴ぢや。貧乏神が俺が家へ來ては氣がかりと思ひながら、用をたして歸れば、右の友だち又向うから來るゆゑ、今度は祝うて「福の神、何處へ行く。」「を、今其方から出て來た。」〔鳥の町〕

目 出 度

物忌ひな人「今日は大切な元日だから、何事によらず假令怪我をしても目出たい」と言へ。と家内の者に言付ける口の下から、下女鍋を下すとて棚が落ちさうになると、「これ、八助殿、棚が目出たくなりさうだ。早く來てくんな。」といへば、八助飛んで行き、しつかり抑へて、「俺が來ちやあ滅多に目出たくさせる事ぢやあねえ。」〔高笑ひ〕

七 寶

「寶づくしの中に七寶といふものがあるが、あれは何だ。」

「さればさ、何だか俺も知らぬが、七寶といふは七色の寶を集めて七寶といふ。其七色の一つを七寶といふは大きな間違さ。」

「如何さま、間違でもあらう、輪違に似たものだから。」（駿河茄子）

神 木

丑三頃あたまへ蠟燭をともし、足駄を履き、散し髪にて王子稻荷の神木のあたりをぐるりくと廻つてあるくを、宮守見とがめて、「これ、人を呪ふなら釘を打ちさうな處を、何故木のあたりを廻つてござる。」といへば、女「あいさ、鐵槌のあたまを落しやした。」（氣の藥）

地 獄

大の悪女嫉妬喧嘩の上頓死をして地獄へ墜ち、幽霊となり夫へ怨をなしたく閻魔王へ願ひければ、閻王御覽じ、「汝が其不器量にて幽霊の願は叶はぬ。」との御叱り。鬼ども女の袖を引いて、「化物と願へく。」（いちのもり）

鉢 木 其一

倍氣深き男、能見物に行き、宿へ歸る。友だち來て、

「今日は能見物と聞いたが、早い歸り。」

「されば、心持が悪さに半過に出て來た。」

「番組は何であつたの。」

「弓八幡、橋辨慶、それから何か知らぬが、雪降に坊主が来て泊めてくれといふ。主の留守ぢや、ならぬと云うたが、それぎり出て来たが、後で泊めねば好いが。（「いちのもり」）」

鉢 木 其二

「わが諺は帆を上げてと云ふ處が佳くない。」

「これ、爺さま、何も知らぬ癖に、やれ早い遅いのと、何でも師匠さまで習つた通りに諺ふのに。」

「なに、俺が知らぬことがあるものか。何でも知つて居る。」

「そんなら、今日習つた諺を當て、見さつしやれ。」

「そんなら諺へ。」

「いで其時の鉢の木は梅櫻松にてありしよな。さあ、是は何だ。」

「知れた事、菅原だ。（「茶の子餅」）」

高 砂

「當春西國へ参りまして高砂の松、尾上の鐘も見物致しました。」

「それはお羨しい事。」

「それについてお前にお尋ね申したいは、あの高砂の諺に尾上の鐘の落すなりとござるが、やはり釣つてござります。」

『その筈く。』

『何故な。』

『はて、あかつき掛けてとあるからは。』 (鳥の町)

か ね

兩替屋の手代金四百兩持つて邸へ行く道で落した故、旦那一圓合點せず、『四百兩の金が落されるもので無し。其上畫中に取られるもので無し。どうもつまらぬ言譯ぢや。』と詮議に逢うて、手代『でもお前様四百兩落すまいとも申されませぬ。』旦那『何故く。』手代『はて、謠に高砂の尾上の鐘のおとすなり。鐘さへ落します。』旦那『たはけめ、そりやあ曉かけての事ぢや。』

(「仕形咄」)

婚 禮

愚なる男婚禮ふるまひに呼ばれ、『定めて謠を諷はずばなるまいが、如何なる時に諷出さう。』と、傍に居る客に聞きければ、客『なる程諷つて好い時には我らそこもとの袖を引くべし。其時諷ひ給はれ。』といふうち程無く膳が出る、尤も二の膳付なり。かの愚なる男二の膳を見て、『もしく、この小さい膳に箸がござらぬ。』といふ故、傍に居る客氣の毒に思ひ、『これく。』と袖を引けば、愚な男膝へ手を突き大聲にて、『たあかあさあごおや。』

謠うたひ

不器用なる侍鼓を打習ひ、笛を吹き太鼓に換へ、色々習ひけれども、もとよりの不器用なれば、一つも埒あかず、「いや〜、謠が好いものぢや。」とて、人の十日であける謠を百日もかゝりて覚え、しかつべらしく人中で諷出せば、友だち「なんと、此頃はいかう謠に御精が出るが、善いお楽しみ。」といへば、此侍「さればその事、侍は何時なん時浪人いたさうも知れませぬ。」

〔鯛の味噌津〕

樂がく

「此頃さるお邸で樂といふものを見て來た。又囃子などとは格別位の違つたものだ。」

「はてな、それはどのやうなものだ。」

「いや、なんでも太鼓の大きさが能の太鼓より五割増も大きくて、笛と云へば十本ばかり束ねて一所に吹いた。」〔鯛の味噌津〕

* 能の囃子。

禁酒

「聞けば貴様は禁酒したと云ふが眞實か。」を、五年が間禁酒だ。「それは
 好い事だが、同じ事だから十年にして晝ばかり飲むが好い。」といへば、「少し
 考へて、『二十年にして夜晝飲まう。』」(郭壽賀書)

酒

獄門の前を酒賣通りかゝりければ、獄門の首「こりや、酒賣待て。」酒屋ぶ
 るく者で「何の御用でござります。」首「酒を飲ませい。」酒屋「お易い御
 用。それで落着きました。」と茶椀に一杯ぐい飲みに飲ませて遣れば、首「あ

あ好い氣味だ。とてもこの事に頭顱を一つ叩いてくんな。(郭壽賀書)

大酒

「昨日摺鉢で呑んだら大きに酔つた。」

「はて、弱い奴、俺あ据風呂桶でさへ呑む。」

「とんだ嘘を。」

「いや、嘘では無い。」

といふ處へ權來る。

「これ權や、あれが据風呂で酒を呑んだといふが眞だらうか。」

「はて、嘘もあるまい。俺あ昨日眞崎へ行つて舟で呑んだ。」

* 隅田川の眞崎。

生 醉

親子大酒飲にて、子息大生醉になつて歸る。親爺内にてとつちら者にて、『われがやうな面の二つある野郎には此身上は譲られぬ。』といへば、子息『俺あこんなぐるく廻る家は要らねえ。』〔花之家抄〕

* 醉眼亂視の態。

酒 好

『酒が飲みたいが錢が無い。』と悔む故、女房氣の毒に思ひ、髪の内をくるり

と刺り、二十四文に賣り、酒を買ひ、亭主に出す。『是はどうして買った。』と云へば、『餘りお前が飲みたいと云はつしやる故此通り。』と中刺を見せれば、『さてもそちは眞實な者。』と涙を流しながら、『まだ十六文ほどは有る。』

〔茶の子餅〕

𩺰

友だち寄合ひ、夜中飲明して翌朝茶など飲み居しに、縁の下にて大勢の𩺰の音。これは不思議と覗いて見れば空徳利が三つ四つ。

大下戸

酒屋の前を通つてもむか／＼して来るやうな大の下戸あり。つらく／＼思ふに俺ほどの下戸も又とあるまいと思つて居たるに、上方から此頃隣町へ越して来た大下戸があると聞いて、それはどれ程の下戸だやら、行つて比べて來うと、かの上方下戸の處へ尋ねて行き、「私は江戸の下戸でござるが、お前のお噂うけたまはり及んで參つた。」といへば、「これは善うこそお出。お前の事も聞いて居りました。さうしてお前の下戸はどの位でござる。」『されば、まあ聞いて下され。先日も樽拔の柿をたべてぼうだらになり、私は覺えませぬが、すつば抜など致したけにござります。醒めてからうけたまはり、面目を失ひまし

た。まあ、此位の儀でござります。」と話す内より亭主の顔が眞赤に。

〔聞上手〕

● 亂醉。

頭痛

「此頭痛が直らうなら十兩は出す。」といふ。友だち「それは一代頭痛の根の抜ける仕方がある。』『どうするぞ。』『箱根へ湯治に行きやれ。瀧の温泉に叩かせれば、一生頭痛はせぬ。』『それは何程かゝる。』『十兩内、外で済む。』『もつと強く頭痛がしても可い。今十兩欲しい。』〔飛談語〕

將 碁

結城へ結を引出しに行き、打續く雨に降込められ、將碁の相手を乞ひければ、宿より近處の者を一兩人呼寄せて指させしに、江戸者相手替れど主替らず、何番指しても叶はざれば、『これ御亭主、今見えられた衆は定めて此土地での將碁の名人であらうの。』といへば、『いや、指しならひでござります。』はてな、もつと弱いのがあらば呼んで下され。』いえ、もうあの衆より弱いのはござりませぬ。』といへば、『はて、不自由な處だ。』(「ちがひないまん中」)

* 碁將碁を習ひ初めたばかりの人。

知らぬごうし

「皆が將碁を指すが、俺も指したいものだ。」

「なにさ、造作は無い。俺が教へてやらう。先づ此う駒を無性に並べて置いて、向うの方へつゝ、かけて當り合ふと、其駒を取つて又空いた處へはるが好い。」と互に指しかゝりて、

「お手には何。」

「王將が二枚。(「いちのもり」)

香 爐

華奢でやひ寄合ひて香の會など、洒落かけて樂しむ處へ、さし出者が來て、
 「お身たちは何をして居やる。」といへば、「を、木市丈、よい處へお出だ。今日
 は香の會ぢや。貴様も連になり給へ。」と勸むれば、「そりや忝いが、俺は
 もうねつから知らない事だ。止しにしよう。」「いや、まあ聞いて見給へ。少し
 の内見て居ると、つひ知れるものぢや。さあ〜。」と無理に座に着けて置け
 ば、木市はじろ〜見て居る。連衆は段々聞いてまはす。「是は今のより少し
 甘い」と云ひながら次の人へ渡せば、「いや〜是は最前のよりは辛い。」と
 云うて、さて彼の男へ渡せば、木市手に取つて顔へ寄せると見えしが、香爐を

取つて拋出し、「え、忌々しい、何のこつた。貴様たちが甘い辛いのと云つた
 から、大きに舌を焼いた。〔聞上手〕

小 鼓

「あの音は誰ぢやえ。」

「あれは隣家の子息の小鼓の稽古さ。」

「はての、久しく小鼓を習うてござる。もう大鼓になりさうなものだ。」

〔聞上手〕

革

「三味線は猫の皮だから膝の上に乗るのは聞えたが、鼓は何の皮だな。」

「ありや猿の皮だから肩に乗るのさ。」

「むう、そんなら大鼓は。」

「あれか、あ、待てよ。あれは脇の下へ挟むな。鯛の皮だらう。」

〔今歳花時〕

* 蛭子の神に聯想したのである。

義太夫

さる隠居義太夫節の高慢を言ふ故、居合せし者ども「どうぞ承りたい。」

と所望すれば、内の娘も「お語りなされやし。」と隠居を責めれば、隠居「さやうなら一段語りませう。」と唸り出せば、大の下手ゆゑ、聞人もそろく逃足になり、後にはたつた一人残りし故、隠居「貴公ばかりは義太夫がお好と見え、お残りなされた。拙者も語る張合がござる。」といへば、「なに、お前に扇を貸したから。」〔ちがひないまん中〕

師匠

手習の師匠川のほとりを通りしに、柳の下に蛙二三疋居たり。師匠思ふやう、むかし小野の道風は柳に飛付く蛙を見て筆道の妙を極めしよし、我も此蛙にて一度能書になるべしと、樹蔭にイミながめ居る。案の如く一疋の蛙柳の枝に飛付かんと、一寸飛び二寸飛び三寸飛び下へ落ちて、「もう草臥れた。」

東坡

「もしえ、あの屏風にかいてある繪に大きな笠を着て馬に乗つた唐の人は何といふ人だの。」

「あれは東坡さ。」

「はて、馬は知れたこと、乗つた人の名は。」

* 東坡に唐馬の音あり。

庵室

相模邊を通りかゝり、庵室に三十ばかりの男唯一人机に凭れ書籍を見て居る體を見て、あのやうにして暮したらば、さぞ面白い事であらうと羨しう思へば、庵室の男ずつと出で伸をしながら、「あゝ、金が欲しい。（「猫に小判」）

茶の湯

四疊半の座敷出来て早々珍客を招き、亭主茶をたて、出す。上座の客押戴き呑む拍子に水涕を垂らし込み、次の客へ渡す。次の客若々しい顔にて涕のあつる處を向うへ吹き、一口呑んで次へ渡す。それより段々順に廻しければ、末座に居る呑しまひの客人押戴き、目を塞いで『南無阿彌陀佛。』

〔富久喜多留〕

茶

『貴様は熱い茶を人より早く呑むが、どうしてあの様に早く呑む。』

『あれは造作も無い。二口三口呑んで、跡は死ぬと思つてぐつと呑む。』

〔茶の子餅〕

煙草

『煙草を忘れた程不自由なものはない。どれ、貴様の煙草和くば二三服下され。』

『いえ、強うござります。』

『そんなら五六服下され。〔茶の子餅〕』

葉たばこ

『葉たばこ。』と賣つて来た。

「これ、たばこ見せろ。」

「さ、御覽じませ。」

「いくらだ。」

「一斤六十四文。」

「それはとんだ事だ。何故その様に安いぞ。」

「はい、これは二月の火事に藏へ火が入りまして、其時の焼残り故のけ物に致しての安賣り。」

「そんな火付の悪いのはいやだ〜。(口拍子)」

苧

「お庭に苧が見えますが、お植ゑなされたか、種でもお蒔きなされましたか。」

「いや、さやうでもござらぬ。大かた掃除の時吹殻でも落したでござらう。」

(「茶の子餅」)

料理茶屋

一人前百兩の料理を食つてみたいと、處々の料理茶屋を聞いてみれど、餘り大そうな事ゆゑ出来ぬといふに、小さな茶屋の亭主「私が致しませう。」と請合ふ故、「なる程頼まうから獻立を書いて見せろ。」といへば、「獻立をお目

にかけます迄もござりませぬ。中位な伽羅で飯を焚きまして、朝鮮人蔘のひたし物でお茶漬。〔氣の藥〕

＊當時朝鮮人蔘は非常に高價なものであつた。其葉のひたしものと言ふは蔬菜の人蔘から思付いたのである。

料理人

井戸端で肴を洗ひながら、刺身庖丁を井戸の縁へ手裡剣打つたやうにしやんと立て、置くと、袖がきよつて井の中へぽかんと落つれば、料理人泪を流して、『さて〜残念な。重代の刺身庖丁を落した。』と、井の中をきつと見つめて居る故、側から『貴様は思切の悪い人だ。其様に戸井の中を見つめて居れば、

落ちた庖丁が出ますか。』料理人『そんなら見ずに居れば出ますか。』

〔氣の藥〕

俄客

『これ〜三助、今日は四五人の客ゆゑ、何ぞ其つもりで大きな魚を買へ。』
『かしこまりました。』と皿を持って表へ出る。向うから『五島鯨〜。』
『いや魚よ、何だ。』
『はい、鯨ばかりさ。』
『そんなら爰へ二三本見せろ。』

〔春俗〕

＊山家出の男。

榮螺 其一

『これ傳介、その榮螺を壺煎にしてお客へ出せ。』と言付け、座敷へ行く。傳介榮螺のこしらへ様を知らず、組に直し置き、組手をして息を詰め、口の開くを待つて居る。餘り遅き故、亭主勝手に出で、『榮螺はどうぢや。』といへば、傳介兩手を上げて、『しい引。』

榮螺 其二

榮螺五つありしを壺焼にして居る處へ、又客一人殖え、亭主ともに六つ無ければ足らず。亭主さそくを出し、『俺には壺の中へ焼味噌でも入れて出しやれ。』

と言付け、座へ列ぶ。はや壺焼を座敷へ出す。亭主蓋を取つて見れば、正眞の榮螺。あわたしく座を起つて給仕人を叱る。給仕『私がよいやうに致しませう。』と客の前へ行き、『誰殿へか精進のは参りませぬか。』(富久喜多留)

* 早速の智恵の略。

きらず汁

『これ三介よ、毎朝汁の身に大根の千六本ばかりももう飽きたから、明日はきらず汁にでもしたが可い。』と言付け置きければ、其朝大根を丸で汁鍋の中へ入れて『はい、きらず汁に致しました。』

飯炊

「俺が親方は米が高いとて荒骨折る者に粥を食はせ、二分が薪を今日中に割れとは、あんまり忌々しい。薪は堅木なり腹は粥腹なり。」と云ひながら、後を見れば、檀那どのが立つて居る。「併し養生食には好い。」(高笑ひ)

貝杓子

「なんと貝杓子は何處で取るの。」

「あれか、あれは靈巖島の脇で取れる。」

「はてな、どうして取る。」

「あれは船をぐつと乗出して、熊手で水の中をぐわらりくと搔搜して、柄の出る處を取る。」(養艸)

猫も杓子

「どうだ、勘彌の芝居を見たか。何だ、まだ行かぬか。去年からきつい當りで猫も杓子も行かぬものは無い。」といへば、「なあに、莫迦を云へ。猫は足があるから行きもしようが、杓子がどうして行かるゝものだ。」

「はて、杓子も辨當について行くはい。」(聞上手)

* 木挽町五丁目の歌舞伎芝居、森田座。

茶
粥

旦那が碁の會に行つて居らるゝ處へ、小僧迎ひに来て、『もし、旦那さまえ、茶粥が出来ました。お歸りなされませ。』と云ひければ、旦那内へ歸りく、小僧をしたゝか叱り、『大勢人の居る處で茶粥とぬかして、俺に恥をか、せ居つた。女房も女房だ、唯夜食が出来たというてよこせば可いに。』と云へば、女房聞いて、『俺もさう言付けてやつたもの。』と小僧がしくじりになつてしまひぬ。又二三日過ぎて碁會に行かれければ、夜食時分に小僧が迎ひに来て、『もし旦那様、お夜食が出来ました。お歸りなされませ。』といへども、旦那は碁に打掛つて一心不亂に傍目もふらず。小僧側へよりて、『もし旦那え、お夜食がようご

ざります。』と度々いへば、旦那大きな聲で、『はて、喧しい。今歸つて啜らう。』(「聞上手」)

惠
方
参

しまつな隠居小坊主を供につれ惠方参に行き、賽錢を上げようと思ひ、巾着を捜して見ても四文錢ばかりなり。是非無く一文出し、後をふりむき『小僧われも拜め。』(「口拍子」)

* 四文錢一枚の意。

客坊

隣家の客坊「先程御用立てました烏目一錢只今急に入用でござるからお返しなされ。」「これはく、貴様とした事が、我を折つた人だ。敵の首と一文銭は取りにくいと云ふが、いやはや感心致した。なる程さう心がけさつしやらねば金は持たれぬ。併しながら餘り軽少で、返すが結句此方が氣の毒なやうだ。』となぶりかければ、客坊「なに、一文が餘り少くつて氣の毒だと言はつしやるか。そつとも苦しうござらぬ。それともさう思はつしやるなら、お辭儀は申さぬ。二文下さい。〔く、り猿〕」

印籠

子息印籠を拾ひ、「もし親父様、今日好い印籠を拾ひました。』と見せる。親父見て、「蒔繪も良いが、昔俺が拾つた時分より悪くなつた。〔嘶の安賣三三〕」

放蕩子息

放蕩子息親爺の前にて袖より頭巾を落したるを、親爺早速とりあけ見れば、黒縮緬の両面、やまも鍔もたつぶりとして銀のこはど掛け。『さてく、おのれは憎い奴、このやうな頭巾はなかく、安い錢では買はれぬ。何處の金で買ひをつた。』『いえく、買ひは致しませぬ。拾ひました。』『何だ、拾つた。はて

今は善くして拾はせる。

*「やま」は頭を被ふ部分、「しころ」は頸筋より肩にかゝる部分。

吝嗇い奴 其一

『伊勢甚めは吝嗇いやつぢや。あの男の處へ行つて、つひぞ何も食はせた事が無い。』といひながらも、用があつてちよつと見廻へば、伊勢甚立出で、『これはいく、ようお出でなされた。まあ、お上り。』と上へあけ、『さてお物違でござります。これ嬢、久しうてお出でなされたに、何ぞ上げましたい。』女房聞いて、『あいさ、何ぞ上げたいものぢやが、此頃はきつい不漁で。』と、例の食はせぬ挨拶する處へ、おもてに『松魚〜。』と魚屋の聲。女房聞いて、『あれも

し、あんな悪口。

吝嗇い奴 其二

『隣家の太郎左ほど吝い奴は無い。砥石を借りにやれば、此方へ来て研けと云ふ。薪割を貸せと言へば此方へ来て割れとぬかす。彼奴ほど割詰な奴は無い。さりとは人を莫迦にする。何でも此方へ借りに來たらば、言返してやるべし。』と思含んで居けるに、或時太郎左が處から人が來て、『御無心ながら少しの内梯子を貸して下さりませ。』と云うてくる。亭主聞きて『を、お易い御用でござる。此方へ来て上らつしやいと云やれ。』〔話問内〕

鸚鵡

「鸚鵡を求めたが、拙者が心に思ふ事をいひまする。」「それは珍しい。近日参り承らう。」或日其客人参られ、かの鸚鵡は是かと見居たり。亭主「なんと、御時分が好からう。近處に名蕎麥が出来た。申し遣はさう。来いよ。その名代蕎麥を取寄せてあなたへ上げい。」家來「かしこまりました。」鸚鵡「これ八助、百がので可いぞ。」〔飛談語〕

・ 召使の者を呼ぶ詞。

珊瑚珠

珊瑚珠の緒、拂物にて百兩にて調べ、紫羽二重の袷紗八重に包みてしまつて置く。ある時婚禮の取持に頼まれ、爰ぞ一番晴に提けて人の目を驚かせようと提けて行き、玄關へ上り俄に思案替り、かの珊瑚珠を若黨へ渡す。「もし殿さま、何故お提けなされませぬ。」「いや、座敷に毒があつて割れ、ば損だ。」

* 食物に毒薬の混入されて居るや否やを検する爲に珊瑚珠を其上にかざす時、若し毒あれば珠は破裂すると云ふ古來の傳説がある。

二度の駈

桃太郎鬼が島の手がらに味をしめ、又思立つ旅衣、今度は龍宮へでも行つて見んと、腰には例の黍團子、網袋に入れて提げて出る。途にて猿に出遇へば、『桃太郎殿、何處へござる。』『龍宮へ寶取りに參る。』『お腰に付けたは何でござる。』『日本一の黍團子。』『一つ下さい。お供申さう。』桃太郎網袋より一つ出して取らせければ、猿手に取り、つくづく見て、『もし、ちひさくなりやしたの。』

貝焼

貝焼を催し、『なんと、聾者の長兵衛に食はせても割前は出すまい。省かうでは無いか。それには好い智恵がある。』と、大きな聲をして、『長兵衛や、なんだ、此頃は追剥が流行るとよ。早く歸りやれ。』『そんなら歸らう。』と出て行く。『さあ、かわかしが居ぬから好い。』と奢る處へ、長兵衛眞裸で来る。『おのしや剥れたか。』『いや、支度をして食ひに來た。』

* うるほひ無し在意から無償で人の物を費す者を指して「かわかし」と云ふ。

隠居

吝しい親爺隠居しても始末の世話を焼き、「やい七介、其様に水を汲んでば釣瓶がたまらぬ。静に斯う汲んだが可い。」と云ひさま、井戸へはまれば、「やれ隠居さまが井戸へ落ちた。」と大騒ぎ、縄よ梯子よと犇めけば、かの隠居井戸の中から、「これく、人雇ひして錢の要ることなら、俺は何時までも爰に居るぞ。」

始末

吝しい親爺が臨終の遺言に、「必ず物入りすな。夜の内に寺へ遣つてくれ。」と

いふ。親類集り、さうはなるまい、かうはなるまいと云へば、親爺起直り「そんならもう死なぬく。」（「茶の子餅」）

熊

兩國へ熊の見世物の木戸番に出る老爺今を限りの大病、大聲揚げての謔語、「熊ちやくく。」とばかり云うて、念佛一遍申さず。女房氣の毒に思ひ、どうぞ臨終の今なればと、念佛を勧めても聞入れず。近所の者ども様々と勸むれども、只「熊ちやくく。」とばかり。中に機轉の男「かみ様、苦勞にさしやんな。俺がお念佛を申させてやりませう。」と大きな聲にて、「これ老爺、明日は大雨だによ。」「南無阿彌陀佛。」（「茶の子餅」）

* 兩國の廣小路には當時種々の見世物の定小屋があつた。

頓死

「俺が家へ来る道心坊が死んだ。」

「あの頑物な男、そして昨日来たでは無いか。」

「されば今朝まで何とも無くてつひ頓死。尤も人の世話にならぬ様に死にたいと豫ての願であつた。さぞ生きて居たら嬉しがらう。」 (茶の子餅)

忌中

手廻しの男、親父が傷寒を煩ひつくと、表へ忌中札を出した。親類ども合點せ

す、「あんまり滅相な。とむらひの用意は内証、忌中札は表向、近所から悔みにも来るものだ。引込ましたが好い。」「なにさ、善く見さつしやれ。」と云はれて見れば、肩に「近日より。」 (茶の子餅)

宗論

81
今はの際に友だちが来て、「手前ももう快くはあるまいから、随分念佛を申したが好い。」「いや〜、念佛は止しやれ。題目を唱へやれ。妙法の功德は有難いことぢやぞや。」「はて、やきたいも無い。必ず一心から念佛〜。」「いやいや。彼奴に構はずともお題目。」「措きやがれ。念佛で無けりや。」「いんにや、題目〜。」と競合へば、病人が「やい、此奴らはまあ。俺がたま〜死ぬの

に。〔仕方咄〕

讓金

引越して来た隣家の親爺、大病もさし重りて、三人の子どもへ讓金の噂を聞
くに、惣領子息に金百兩、次男に二百兩、三男に三百兩との事。はて變つ
た讓金ぢや。惣領こそ三百兩で、二男三男は順に少さうなものぢやが、どう
した譯ぢやと、よくよく聞けば、借金を讓るの。〔飛談語〕

人玉

莫迦子息がぶらく煩ふを、繼母つらく當つていぢり殺したれば、翌晩から

人玉がごろつき廻り、近所の人々が皆煩ふ故、名僧に占つてもらひければ、「あ、
是はかの莫迦どのの一念でござる。」といふを、近所の人「それならば其家一
軒ばかりでありさうなもの。」といへば、「はて、そこが莫迦さ。〔仕方咄〕

關羽

關羽死んで地獄へ行き、閻魔王城を攻落し、自ら閻魔王になつた故、鬼ども
地獄中を觸れて廻る。『唐人さまのお閻魔へ。』〔口拍子〕

* 「荒神様のお閻魔へ」の口合。

返魂香

女房に別れ今一度逢ひたき由友だちに咄す。友だち「傳聞くに墓の前で返魂香を焚けば姿があらはれると聞く。」「そんならさうして逢はう。」と藥種屋へ行き、つひ返魂香を忘れ返魂丹を百が買ひ、墓の前にて焚きければ、墓づしと動く。秘密の焚物の驗ありと喜んで居る内、はや返魂丹焚きしまふ。もう百が薫べようと内へ錢を取りに歸る。母聲をかけ、「おのしは今の地震に何處で遇やつた。」（「富久喜多留」）

悔み

横丁の隠居が大病、見廻に行つてやらすばなるまいと出掛けた所、蟲干をするとして表に簾を懸けて置いた。扱こそもう埒があいたさうなと、つと這入つて、隠居様おなくなり、さぞお力落しでござりませう。申さうやうもござりません。驚入りましたでござります。」「もしく、こなたは餘り龜相な人だ。人の親が煩ふと云ふに、面白さうに何のこつた。

「はあく、是はしたりく。眞平く御免く。大きに誤りました。必ず氣に懸けないで下さりまし、私が龜相はお前も御存じのこつたから。ほんに死な

しつたら必ず知らせて下さりまし。〔く、り猿〕

遺言

天の邪鬼のやうな子息め故、遺言は反けて言ふが好いと、子息を呼寄せ、「もはや暇乞ぢや。死んでも必ず物入すな。菰に包み川へ捨てよ。」といひて死ぬ。子息思ふやう、さてく是まで親の仰せに背いたが、一代一度の事、是ばかりは用ゐるすばなるまい。〔茶の子餅〕

* 表裏反對に言ふ意。

お迎ひ

仕事師のおふくろ大病なれば、友だち見舞に来て、「どうだの、おふくろ。飯でも食へますか。」「いや、もう俺も今度の煩ひはお暇乞ぢや。早くお迎ひが来れば好うござる。」「なにさ、お迎ひの何のとそんな奢つた事を言はずとも、つかけて行きなさい。」

葬禮

「さて立派なとむらひの。」と大勢が立つて見て居る。田舎者「もし、是は誰

殿が死にましたのでござります。』江戸者「是かえ、病人が死にました。」

〔春の駒〕

江戸

「江戸は広い處だ。日本程あらうか。」

つれ「とんだ事を云ふ。日本は江戸の二つがけ。」

〔原題「田舎者」〕〔茶の子餅〕

年代記

田舎者山下をそり、両面の年代記を見て、「いくらでござります。」「是は

十六文でござります。』田舎者煙草入より八文出し、「こゝへ片面下さい。」

〔春俗〕

・上野の山下に古本屋が多くあつた。

榎 挺

「これ〜、作右衛門どの聞きなさろ。お江戸衆は怖い。毎日八丈八寸ある榎挺をがり〜かぢり申すと云ふこつたよ。」

「をや、てんこちも無い。あんとして喰はれべいぞ。」

「はあて、お江戸は八百八町だもし。毎日榎挺で味噌を磨るに、一町で一すづつ減ると見て、ざつと積つて八丈八寸では無いか。〔鯛乃味噌津〕」

据風呂

「江戸は錢湯が調法でうらやましい。此方の在處へも折々船湯が來ますが、間遠で困ります。」

「そんなら据風呂が好うござらう。」

「さわばさ、前方据風呂もたてましたが、寒い時分には湯に沸くまで這入つて居るのがつめたくてなりません。〔いちのものじ〕」

駿河の客

駿河より客人來る。どうぞ馳走に國を譽めて喜ばせようと思ひ、

「あなた様のお國は結構なお國で、竹細工など見事に致します。それはく器用な細工、餘國にはござりませぬ。」

「いやく江戸の龜井町の方が上手でござる。」

「どう仰せられても駿州は日本一のお國でござります。」

「何故でござる。」

「はて、茄子を御覽じろ。一番早く御賞翫なされう。」

「いやく本所の砂村が早くござる。」

此客とかく卑下するが癖、はてどうぞ卑下させぬ譽めやうが有りさうなものだ
とつくく考へ、

「を、それく、あなたは他國をお譽めなされるが、駿河の富士と來ては餘國

に並びなき名山でござります。

「いえ、それも半分は雪でござる。」〔富久喜多留〕

*今の日本橋區龜井町に竹細工品の問屋があつた。寛延四年出版の「増補江戸鹿子名所大全」卷六上、龜井町の條にも「小傳馬丁の東、籠細工人多し。通り油丁の北手」とある。

** 駿河茄子と云つて早熟で名高いもの。

*** 砂村の玄伯茄子と云つて最も早く江戸市中へ出廻るもの。

間 違

伊勢へ太々講に行く者あるを、さる田舎者聞いて、俺も伊勢へ太々講とやら

を打ちに行かうとて、錢百文持つて伊勢へ行く。「もしく、太々講を打ちたうござる。」「お初穂は何程お持ちなされた。」「あい、百文持つて來ました。」「それでは太々講は打たれませぬ。」「そんなら、どれ程で打たれます。」「百兩からでござる。」「それはあんまり高いものぢや。些負けなさい。」「お初穂に負けは無い。」「そんならば、此百で金柑を打つて下さい。〔春俗〕

買 出 し

木曾の山家へ材木買出しに行くとして旅宿に泊りしに、衝立のやうなる風除の繪に、浪の中に薪の焚さしのやうなる物あり。

「御亭主、あの繪は何でござる。」

「はて、江戸衆があれを知らつしやらぬとは。

「それでも知れませぬ。

「あれは鯉節といふ魚さ。」〔高笑ひ〕

潮 煮

田舎からたま／＼の珍客。氣を張つて鯛の潮煮、亭主は自慢の鹽梅。客人はむつとした顔で、「これ御亭主さま、いかに拙者が田舎者なればとて、鯛の眼が食はれようか。」〔春みやげ〕

練 馬

馬附大根うり、七つ起して江戸中を曳きあるけども、不仕合にて一つも口に當らず、もはや日も暮れか、りければ、馬士馬に向ひいふやう、「今日は不仕合にて一本も賣らず、さぞわれも草臥たるべし。是から俺が替りて背負はん。」とて、大根を下し一つに束ねて背負ひ、「さあ、是からわれに乗るぞ。」

〔高笑ひ〕

＊一人の買人も無いこと。

盗人

浪人者裏店を借り引移りしに、諸道具無ければあまり見え悪し、買ふには金が無し、如何せんと案じ煩ひしが、ふと思付き、壁を白紙にて張り、筆筒、長持、はさみ箱のたぐひを彩色繪にかき置きたり。盗人外を通りて之を見、まことの道具と思ひ、ある夜浪人の留守を伺ひて忍入りしに、くらやみ故心當りの處を搜りく見れども、皆壁にて何も無し。これは合點行かすと、火を點して見れば繪なり。盗人どつかと坐して手を打ち、「さても太い奴だ。」

〔即席料理〕

* 衣服を納れた箱で棒の片端を通し其中程を肩にあて、擔ふもの。元來

身分の高い人の道中などに持たせて行くもので、浪人風情には相應せぬ調度。

貧家

此上も無い貧乏人の處へ盗人這入りて、其處ら搜して見れど何も無し。亭主はてんとくじを引被り、知らぬ顔で寢て居れば、「え、忌々しい。此やうな何も無い家も又あるまい。」と小言をいふ。亭主あまりのをかしさにくつくくと笑へば、「いや笑ひごつちや無い。」

* 打菓を綿に代へ揉紙を側とした蒲團で貧民の使用するもの。天得寺と書く。

臆病

臆病なる盗人ちと稼いで来ようと、黒装束にて出掛け、ある表店を覗けば夫婦の口舌、こいつは何時寝ようも知れぬと、其隣を覗けば、もの静ゆる、段々戸をこち放して這入つて見れば空店。盗人溜息をついて、先づ首の氣遣は無し。

* 仰山に芝居氣をもつた姿。

(「ちがひないまん中」)

八兵衛

儒者の家へ盗人這入り、盗人に金銭を與へ、

「其方が名は何といふ。」

「八兵衛と申します。」

「はて文盲な。同じいふなら八びやうると云ふものだ。そしていづれから忍入つた。」

「はい、ねりびやうゑから這入りました。(原題「盗人」) (富久喜多留)」

笠盗人

盗人笠を提げて出る。跡から亭主見え隠れにつけて行けば、筋違の見附から日本橋へか、り、芝の田町の古道具屋へ寄つて笠を卸して、「なんと御亭主、此笠を。」といふ處へ、「泥棒〜。」と聲を掛けられ、雲を霞に逃けた。跡へ行

つて釜を取つて歸るを、道具屋事情を聞いて、「さてお前は氣の長いお人ぢや。駒込から此處までつけてお出なされずと、取つて逃ける時何故早く聲をお掛けなされぬ。」といへば、「いや〜、持つて居る内聲を掛けると、此釜を投げられます。」（「氣の藥」）

茶の間

泥棒茶の間へ忍入り、居間をのぞけば亭主手鎗を持つて待ちかける體、是は叶はぬと勝手へ出れば男どもが棒を持つて覗ふ體。玄關へ出れば若黨が抜切で控へる。納戸を見れば女房が薙刀かまへて、入らば切らんす其勢。盗人今は爲ん方無く、大音揚げて「どろぼう引〜。」（「氣の藥」）

葛籠 其一

泥棒葛籠を背負つて出て行くを見すまし、跡からつけて行き、暫くして取返して来る。女房「どうして取返しなされた。」「さればよ、彼奴が家へ歸つたを見すまして、そつと這入つて取つて来た。」といふ内、又かの泥棒が来て背負つて行く。又「合點だ。」とつけて行き、又取返して歸り「嬢々、又取返して来た。」女房「そんなら又來やせう。」「いや〜、もう來まい。葛籠が大分軽くなつた。」（「氣の藥」）

葛籠 其二

ある寢坊の家へ盗人這入る。世帯道具残らず盗まれ、葛籠一つになる。さてく、このやうに盗まれてはどうもなるまいとて、葛籠の内へ這入つて寝る。是では此葛籠を盗みに來ても知れようと、安堵して寝る。又盗人來て其葛籠を擔出す。中で寢返りをした其音に驚き、葛籠を捨て、逃げる。そこで葛籠の蓋を明けて出た處が野原。「南無三、家を盗まれた。」(原題「盗人」) (「春俗」)

戸板

店の戸がぐわらくく鳴つてやかましいと、油を澤山に引きたれば、するりす

るり。女房「それは用心が悪い。夜人が取つて行きますぞえ。」はて扱、夜は戸をしまつて置くはえ。(「話問内」)

貧乏人

盗人夜半比に忍入り、段々見て廻るに、箆筒にも葛籠にも衣類とてはさつばり無く、米櫃には米が無く、味噌桶には味噌が無し。見かけと違つてきつい貧ぢやと、あまり氣の毒さに夫婦を揺起し、「俺は盗みに這入つたが、あまり貧な様子、何とも笑止な故合力いたさん。」と、金子二百疋出してやれば、夫婦大きに歡び、厚く禮をいつて別れ、一二町も行くと、跡から亭主「泥棒く。」と追つて來るを、おのれは恩を仇で報ずる人畜め、眞二つにしてくれんと立停

れば、「あい、お煙草入が落ちて居りました。」（「氣の藥」）

走る名人

追走くらの名人あり。或時盗人を追走け行く。向うから友だち來り、「なんだく。」「泥棒を追走ける。」「その泥棒はどれだ。」「あれ、跡から來る。」

（「富久喜多留」）

水

「やれ、どろぼうく。」と棒ちぎり木にて追駈け、あまりに息がはずむ故、豆腐屋へ這入り水を貰つて飲むに、泥棒も同じく息をつきながら水を二口三口

飲み、皆の者を振り返り見て、「さあ、又一駈かけませう。」

（原題「盗人」）（「うぐひす笛」）

大石

力を持みに夜の獨旅。向うより小山のやうなる男十人ばかり「酒手を置け。」とぬつと出る。「いや、酒手があらば夜は歩行かぬ。取溜があらう、此方へうせう。」「いや此奴、ど太い奴。」といふ傍から「そいつた、めく。」と聲かければ、「いや、汝等悪い奴。」と、あたりに有りあふ大石を何の苦も無くさし上げ、ぶち付けんと思ひしが、いやく抛付けたらば中つた奴は片付けようが、残りの奴が逃げようと、かの石を小脇に搔込み、ひつちぎりく抛けた。

貸店

〔茶の子餅〕

「もしえ、わつちやあ盗人でござりやすが、お前の店を貸しておくれなさいやせ。」を、易い事ぢや。店請さへあらば貸して進ぜよう。『あい、お忝うござりやす。』と直に友だちの處へ行き『これ、俺あ店借りたが、大屋が盗人合點で貸した。手前、店請に立つてくれや。』を、立ちは立たうが、大屋はたしかな者かな。〔仕方咄〕

古道具屋

盗人が道具屋の店へ来て大小を盗んで指し、一散に走出すを、隣家の亭主見つけて知らせければ、道具屋追駈けて行き、暫く過ぎてすごくと歸る。隣家の亭主『盗人は逃延びましたか。』といふ。『いえ、一三三町で追付きました。先方も侍、滅多なことは言はれませぬ。〕〔高笑ひ〕

柱隠し

『此頃古道具でいきな柱隠しを買つて來たが、何か讀めぬ字が書いてある。來て讀んで見てくりやれ。』

「なんだ、唐様かな。」

「を、さ、唐様ともく。大方誰ぞ手かきの書いた物であらう。」

「どれ、行つて見よう。」

と連立ちて行けば、床脇の柱に掛けてあり。讀みて見れば墨くろくぐと、「御手付三日切。」（鯛乃味噌津）

鐵 砲

小道具屋の見世に鐵砲の有るを「あの鐵砲の代は。」

「臺は規でござります。」

「いや、金の事さ。」

「直鎗でござります。」

「はて、直は。」

「すぼん。」（茶の子餅）

び い ざ ろ

「旦那、此お簾はびいどろでござりますの。」

「さればさ、此頃出入のお邸から拜領した。」

「是は美しうござります。とんと好い女をさかさまにしたやうだ。」

（笑長者）

硝子

「さて近々に金儲の蔓に取付く事が出来た。

「それは耳より、どうぢやく〜。

「されば先年から川々に埋れたる金銀おびたしくあるに依つて、見出す工夫をつけたが如何だ〜。

「それは面白い。俺も半分乗りたい。

「それならば舟を借り給へ。

とて兩人舟に打乗り、兩國邊へ乗出し、豫て用意の大硝子を取出し、「此中へ這入り給へ。」といつて能く口をぬめ、綱を附けて水底へ下け、「如何ぢやく、有る

か〜。」『有るとも〜。』 錢金勝指金物、おびた、しい。』『早く取りやれ。』

『手が出ない。』 『落嘶鳥の町』

毛拔

『聞きやれ、通町に毛拔屋が出来たの。喰鹽梅を見ようと思つて、それをこれをと云うて抜いたれば、残らず抜けたから、買はずに歸つた。』 『そんなら、俺も。』 『我も。』 と聞傳へ行く程に、店頭へ山の如く人だちして、「こちらの毛拔。』 『あちらの大きなの。』 と云うて抜きたてる。亭主棒を持つて出で、「抜いたは左へ〜。』 『いちのもり』

* 開帳場などで見物人の雜鬧を制する役人、棒を杖にして「靈寶は左へ

く。』など、叫ぶ格。

傘

傘を張り習ひ、七八本張上げしが、油引いてから一本もすぼまらず。これはつまらぬと無理に覺めば、ぱりくくと裂ける。どうしたものでちやと困りしが、折からの夕立、しや、好い思付があると、傘を開いたまゝ、辻へ持つて出で、
『それ安い、負けたく。』と賣りかけしに、何が俄雨のことなれば、大勢集り、奪合ふやうに買つて行く。『こりや嬉しや。』と内へ走歸り、『思付をやつて傘を残らず賣つて來た。』といへば、隣家の人が『それは好かつた。いくらに賣つたぞ。』南無三、餘り急いで錢をば取らずにやつた。〔話問内〕

下駄

『下方が處へ行つて、下駄を一足誂へて來い。注文は下駄の此通りハ鐵の紙をびつしりと打つのだ。』

『はい、そんなら雪沓のやうにかな。』

『いやく、上の方へ打つさ。度々人のと間違ふから、おれが思付で類無しにして人に肝を潰させるのさ。』

『はい、それではお前穿かれますまい。』

『をうさ、持たせて歩行くばかりさ。〔話問内〕』

* 履物類を賣る家。下つた物を置く處から下方と云ふ。

*** 下駄の表を指して云ふ。

*** 下駄の裏と心得て云ふ。

龜相者

『もしく、新八さん、履物が違ひました。』新八取つて返し、『是はく不調法、お宥しなされませ。』というて履違へし草履を遠くへ脱捨て、我が草履を取つて戴いて穿く。〔笑長者〕

髮結床

『ぐつと根を詰めて下さい。』

『あい、随分詰めませう。』
と金輪際引詰められて段々あふのき、鏡を借りて頭へかざし、草履を見て穿く。〔茶の子餅〕

髮結

月代の上手な髮結『俺はどの様に揺かれても切るといふ事は無い。』と高慢をいふ故、『俺が思入揺いて剃らせるが、切らぬやうに剃るなら蕎麥を振舞はう。』『若し切つたら私が蕎麥をお振舞ひ申す。』と、賭にして剃りか、れば、男はむしやうに揺く。髮結も奇妙に外して切らぬやうにしたれど、餘り強く揺きし故、顔を剃る段になつて鼻をぞつべりと殺がれ、鼻聲になつて、『先蕎麥は

食つたぞく。〔氣の藥〕

嫁 姑

無性に無理をいつて嫁をいぢる 姑あり。あの無理はどうしたら直らうやらと、明暮嫁の苦勞、どうぞ仕方はあるまいかと思ふ處へ、町内から寄合を觸れて来る。『あい、主人が留守でござります。歸りましたら申聞かせませう。』と云ふを、姑ははや鳴り出し『俺が内に居るに、何でも俺にはひし隠しにする。何の寄合ぢや。』と叱られ、嫁はさつそくに『いや、外の事でもござりませぬ。此町内に嫁をいぢる 姑が二人ある程に、異見をして事の無いやうにせよとある寄合でござります。』と云へば、『はてな、今一人は誰ぢや。』

〔鳥の町〕

銅の鳥居

隣家のかみさま大難産、さても氣の毒、醫者よ人蔭よと大さわぎ。亭主こらへかねて裸になり、井戸端へ飛んで出で、水をざんぶりと浴びて、『南無金毘羅大權現、何とぞ安産致すやうに。御禮には青銅の大鳥居をさし上げませう程に。』と一心に祈る。産婦聞付けて、『もし是え。俺が安産したとて、どうまあ銅の鳥居が出来るものぞ。つがも無い事ばかり。』と云へば、『はて、やかましい。俺が金毘羅を欺す内に早く産み給へ。』

早約束

何でもかでも欲しがる病の人が来た。「これはお出、好い處へ。今日は妻が帯の祝。」『はあ、それはお目出たいな。どうぞ御平産の上御出生を拙者申請けたい。』『はい、まだお約束の處へも参らぬが、お望ならば上げは致さうが、男子が出ようやら女子が出ようやら。』『いや、孰れでも苦しう無い、申請けたい。假令男女の中で無くても。』〔今歳花時〕

梅が枝

殿御秘藏の梅を隣邸より度々枝を折る故、以ての外御立腹、見付け次第手

討にするとの御意、お側の衆たつておんなだめ申し、『私儀よろしく取計ひ申すべき。』とて御請申し、梅の枝へ登り狼籍あらばと待ち居しに、枝を折らんとさし出す手を取りて見れば、十七八なる美婦なり。『どの枝が御望み。』

〔いちのもり〕

水打

夏の夕景色。門へ水を打つて居る處へ、好い年増が氣色どつて来る故、打ちか、つた手桶を左へ振廻し撒かんとする處へ、寄麗な振袖が來かゝる。是へもか、つてはと此方へ振向けば、年増が間近く来る。爲ん方無さに手桶をさし上げて、手前の頭からざつぶり。

雷かみなり

夕立大がみなり頻なりしが、さるお大名至つてお嫌ひにて、雷の鳴る處を目當に鐵砲をすぼんくと打掛け給へば、空にて子どもがみなり大きに驚き、「かかさん、ぼんくとが怖い。」と泣出す。親父雷「これ、嬢、蚊屋を敷いてやりやれ。」〔鳥の町〕

* 雲の上に居ること故吊る要は無い。

戸棚

ぐわらく〜ぴかり〜。『そりや、鳴るは。』と亭主大の嫌ひ、「これ〜、好

蚊屋は曲けてしまふ。どうせうな。あれ、又ばち〜ばちと鳴つて来る。こりや、もうたまらぬ。』と、戸棚を開けてかけ込む處へ、小僧が外から走けて来て、親父が戸棚へ隠れるを見つけ、「母さんや、明日も又お節供かえ。」

* 節季(歳末)と節供を混同した子供の詞。此親父節季に戸棚へ隠れて留守を遣つたことが度々あつたのである。

大黒

ある貧乏人福を祈らんと、金泥の大黒を買來り、丹誠を碎き祈りしかば、或夜あらたに御靈夢には、「俺とても外に何も無い。晩からべたに居て、此俵を二俵ながら授くる。」との事。『あら有難や。』と推戴き、中を開けたれば、緒

土の焼物。 (「駿河茄子」)

* 臺にする物無しにの意。

借錢乞

友だちの方へ錢五百文の無心に行く。『なる程、貸しは貸さうが、明日の晩は是非〜無ければ我ら甚だ難儀になる。きつと返すならば。』と議定して貸す。さて翌日の晩になりても返さず。是非無く催促に行き、『昨日の錢は外よりのおあづかり物にて、今宵先へ返さねば、我ら言譯に首でも縊らねばならず。』といへば、借主『まあ、さうでもして間に合せて下さい。』 (「壽々葉羅井」)

不禮講

近處へ振舞に呼ばれけるが、至つて貧乏人にて着物に困り、是非無く綿入羽織を着て其上へ拾羽織を着て袴を穿いて行きけり。盃本膳も相濟み、是より皆々『無禮講〜。』と袴を取れども、『私はこれが勝手でござる。』といふに、皆々合點せず、大勢寄つてたかつて無理やりに袴を取りて、『はて、きついで御成人。』 (原題「貧乏人」) (「壽々葉羅井」)

己惚

若い衆大勢寄合つて夜斲。

「さあ今夜は蕎麥切にしようぢやあるまいか。

「を、それは審かる。何でも蕎麥を審るなら、今夜は此中での好い男に買はせうでは無いか。

と云へば、己惚めが頭を叩いて、「是は迷惑。」（「聞上手」）

いかのぼり

つんとした女房丁厮を連れて通る後へ風が落ちたを知らぬふりにて行く。

「今落ちたは何だ。」

「風でござります。」

「む、おれは又仙人かと思つた。」（「嘶の安賣」三）

石橋

今度富十郎が石橋を致しますが、おかみ様お前に生でござります。

「おれに似たとは。きりやうか。」

「いえく。」

「風俗か。」

「いえく。」

「何處か。」

「髪の毛の詰るところが。」（「茶の子餅」）

* 中村富十郎、天明安永年間の名優。

** 生寫し(酷似)の略。

見えばう

大の見えばうな男ありけるが、客來りける時、「私は生れついて汚れた物を遂に着たこと無し。洗濯するとそれぎり人に遣つてしまふ。」といふ處へ、仕立屋「はい、お上下の洗張が出来ました。」と持來る。客「今貴様は洗つた物は着ぬと云つたが、其上下はどうしたものだ。」といへば、「是は寢衣だ。」

〔郭壽賀書〕

羽織

越後屋から縮緬の羽織が出来て持つて來る。友だち居合せ、「其羽織を今夜貸し給へ。」「これは迷惑だ。まだ袖も通さぬ。」「はて、そこを貸すのが男だ。」と無理無體に借りて行き、さて其翌日歸り、「貴公のお蔭で昨夜は撥ねました。」「さうだらう〜。」「紐がらを響めるやら。」「さうだらう〜。」「胴裏を響めるやら。」「さうだらう〜。」「みんなが貰ひたがる。」「さうだらう〜。」「ひらりと脱いで遣つて來た。」「さうだらう〜。」

• 景氣が佳かつたこと。

立聞

さて、御無沙汰いたしました。先づお變りもなくめでたい。御亭主さま、只今是へ参る途で眞の美人といふ女を見ました。笠森のおせんでも敵ひませぬ。あれがほんの三十二相などと申すのでござりませう。『亭主』はて、あればあるものな。『客』申し分は少しも無けれど、もし言は、鼻の下の些と短いはかりが疵でござります。『亭主』来いよ、お茶を上げい。『腰元鼻の下を随分引延し、客へ膝を突附けて、『お茶あがりやせ。』(「飛談語」)

* 天明年間谷中の笠森稻荷境内の茶屋に出た當時高名の美女。鈴木春信が其肖像を錦繪に作つて評判を取つた事は人口に膾炙した話である。

豆腐

下女段々と出世して飯焚を使ふやうになり、臺所へ出て、『これ、さんや、何やら白い物が半挺載せてあるが、それは何といふ物だ。』(「みになる金」)

田舎女

櫻田治助が家へ奉公に行きしに、亭主ふらりと遊んでばかり居る故、かの女思ふやう、盗人か但し人買かと思ひ、女房に『旦那様の御商賣は何でござります。』と云へば、『おのしらが知る事では無い。』とばかり云ふ。尙々怖くなり、隣の家へ行き聞いてみれば、同じ様なる挨拶故、日々心をつけるうち、亭主二

階へ上り作を案じて居けるを、下女階子の上り口にて立聞して聞けば、「此金を之に盗ませて、その跡をあの子の罪におとすか。え、是で好し。」と云ふを聞くと、下女階子より降りて直に駈落。〔いかのぼり〕

* 有名な狂言作者、安永年間の人。

役者

* 高麗屋が處へ弟子に這入り、まだ馬の後脚も出来ぬから、内で飯を焚いて居ると、ある時魚をれうるとて庖丁の柄が脱けて面へ中ると、うしろへ倒れて『だああ。』〔即席料理〕

* 名優松本幸四郎、安永天明年間の人。

** 芝居で斬られて倒れる時の叫聲

役者の女房

芝居の詰役者の女房打寄り、夫の歸りを待つて四方山の嘶の處へ、同じ仲間の何某役をしまひて歸りたれば、中島何某が女房目ばやく見て、「權右衛門様お早うござんす。私が内はどうしやしたえ。』『あい、たつた今首を斬られさした。』『はあ、そんならお汁を温めやせう。』〔壽々葉維井〕

* 大勢一つ部屋に居る下級の俳優。

業平

若き男煩ひにて眉毛少し薄くなりしを見苦しく思ひ、眉に墨を塗りしを、三十二文程不足の子息『もし、お前は眉を何故墨で塗りなされた。』といへば見付けられて憎さも憎し『是は今流行る業平眉といふものぢや。』と聞いて内へ歸り、眉を剃落し墨にて塗りければ、親父見付け『おのれか其面は何ぢや。悉皆なりを見るやうな。』といへば『いよ、親父の洒落め、平を言はずに。』

〔鳥の町〕

・なりんばう(癩病者)。

長羽織

今世間では蝙蝠羽織の短いのが流行る。誰もく同じ短い羽織は人真似するやうでこけな。俺はずつと退いて長羽織、膝から下へ三里とくろぶしの國界まで引ずり、親爺の留守を見合せて一文字に駈出す。横町のまがり處で親爺にはたと行合ひ、むすこちやつと兩袖合せて羽織を隠せば、親爺『やい、帯をして歩行きをれ。』(「口拍子」)

異見

『これく權太や、親といふ者は有難いものぢや。なんぼ錢金が澤山有つても

買はうといつて買はれるものぢやあ無い。随分大切にしやれ。
 「を、さ、買はうといつても買はれぬものだが、又賣らうといつても買人の無いものだ。」（「嘶の安賣」三）

檢校

檢校の子息大放蕩になつた故呼付け「おのれは近い頃一向内に居つかず、多くの金銀を遺捨て、すゑなく何の身にならうと思ふ。よく考へて見ろ。今の内は俺が斯うして居ればこそ、其様に金も遺ひをる。明日が日俺が若し眼がぱつかりと開いたら如何する。」（「嘶の安賣」三）

* 盲人の官名、江戸時代には盲人で蓄財をなし高利貸などとして暴富を得

た者が多かつた。此檢校も其類らしい。

** 有明者ならば死んで眼をつぶる處なれど、失明者ゆゑ死んで眼があくと云ふ意。

音の字

「俺が子息めが四角な字ばかり習うて居るが、醫者にはなるまいし、俺が商賣では要らざることさ。其證據には觀音の音の字などは草で書けば七百ぢやに、真で書けば結句六百になる。」（「聞上手」）

* 楷書で習字するばかりで無く、楷書で書いてある本を読む事をも含む。

凧

子息が凧を揚げるに揚らず。親爺出て、『どれく、俺が揚付けてやらう。向うの河岸へ持つて来い。』とて、小僧を連れて行き、一走り走ると能くあがる。親爺おもしろがり、引いたりしやくつたり餘念無し。『これ、父さん、もう俺にくんねいく。』とせつけば、『え、喧しい。われを連れて来ねば好かつたもの。』

合羽

親父、娘に合羽をねだられ、つぶやきながら爲うこと無しに買つて来て、『そ

れお望の合羽。』とさし出せば、娘悦び、『好い合羽ぢや。』と引くりかへし、『父さんえ、とても買つてくんなさるなら、襟は天鷲絨が良いもの。こんなをかしの装束。』と氣に入らねば、『なに、装束が悪い。やかましい、費えな事をいふなよ。これ、干物で見ろ。むしつて棄てる處だ。』

伊勢物語

『母さん、私や今川も百人一首もあけたから、伊勢物語を買つてくんな。』

『もし旦那え、伊勢物語が欲しいとき。』

『を、買つてやれさ。女の事なれば参宮はならず。〔いちのもり〕』

* 「女今川」、女子の教訓書。

年忌

何が持佛へ「来る酉年亡父十三回忌」と大筆な掛札。お袋見て、「あまり利口でも無き仕方、止しにしやれ。」といへば、「御尤には存じますが、是は謂がござります。」『それはどの様な事だ。』『はい、浅草を真似ました。』〔春俗〕

* 浅草観音の開帳の掛札の意。

兄弟

子ども二人遊んで居る。弟が言ふには、「さみだれとさ月とは何方が先だ。」と聞く。兄が言う「あれも曆によつて違ふこともあるが、まづさみだれは三月

さ月は五月さ。」といへば、親父傍に聞いて居て、「俺が處も兄が無いと内は闇だ。』〔猫に小判〕

思案

老人橋を通りかゝり、板の透目へ杖を突込み、はつと思ふはずみに手を放せば、杖は川へ落ちる。是に當惑して暫く思案をめぐらし、又腰より扇を出してかの穴へ入れ手を放して、「は、あ、此おつぢやな。』〔茶の子餅〕

教訓

兄弟二人を呼び親父いふやう、「惣領は外に言分は無いが、とかく人の衣類、

紙入、煙管、何を見ても値打をするが悪い癖ぢや。随分氣を付けたが可い。傍で聞いて居ても氣の毒。又弟は地口とやらが好で、重い人の前も憚らず、大事の相談の中言にも地口を云ふ悪癖。必ずく二人ともに氣を付けて癖の出ぬやうに心がけたが可い。』と異見すれば、惣領は手を突き、有難い御教訓、只今までうか／＼と心付きませず居りましたが、思召の段身にしみ／＼有難うござります。世話にも御異見五兩、勘忍十兩と申せども、此御意見はどう安くつもつても三百兩が物はござります。』と直に癖を云へば、弟も怵へかね、『兄貴、三百兩とはいけんの鐘か。』(原題「異見」) (「茶の子餅」)

* 無間の鐘(源太梅が枝)の地口。

坊主

「こりや、弟、今日は幸ひ日からも好し。いよ／＼檀那寺へお頼み申して出家さすぞよ。兄が家督を取るのを必ずうらやましいと思ふな。お主が學問精出すも兄が十六盤精出すと同じ事だ。兄が此家の檀那になれば、お主は和尚さまになる。又兄が魚を食へばお主も油揚げを食ふはさ。又兄が女房を有てばお主は又、あゝ油揚げを食ふはさ。』(「話問内」)

火いぢり

よく火をいぢる人あり。亭主考へて、『今度からあの人が出来たら、火鉢に火箸

を附けずに出せ。」と言付けて置きけるに、或時彼の客来りければ、女房心得て火箸を隠して火鉢ばかり出しけるが、暫く咄す内に、此客人火鉢を見つめて口の内で何やらつぶやく故、亭主耳をすまして聞くに、「此火を彼方へ、あの火を此方へ。」（「聞上手」）

世話好

何事につけてでも世話やき好きな手代あり。實な奴とは思ひながら、益にも立たぬ世話にかゝり、店の事もそこ〜にする故、旦那呼付けて大きに叱り、「きつと止にせよ。」と言付けければ、手代もあやまり、「悪い癖でござります。向後たしなみませう。」といひしが、又此頃は何にか、つたやら、萬事を打捨て、

裏の物置へ度々通ふ。旦那跡かちつけ行きて見れば、桶の中へ蛇を一疋飼置きけり。「そゝはまあ、何にするぞ。」と尋ねれば、「はい、これは此間町内に迷うて居りましたを、子どもが寄つていぢります故、あまりむごい事ぢやと存じて、養うて置きました。どうぞ此奴を蟒蛇に致して、わたしが在所の池の主にも致してやりたうござります。」（「聞上手」）

蒲焼 其一

鰻屋の前を毎日通る度に、「扱も甘い匂ぢや。」と嗅いで通りければ、大晦日に鰻屋から呼込み、「毎日の嗅がせ代六百文でござる。」「それは安いものでござる。」と懐より六百文拋出し、「これ此音を聞き給へ。」（「富久喜多留」）

蒲焼 其二

鰻親子づれにて大川筋を段々およぎ、駒形の前へ來ると、子鰻「とつさんや、ぶん〜とむまい匂がするのう。買つてくんねえ。」とねだるを、親鰻「あれは蒲焼といつて、泣く子を醬油の附焼にするのだ。早く黙れ。」と、だましなから泳ぐうち、子鰻見心にむまい物か知らんと、尻尾をべろりとしやぶつて見てたまらず、段々喰ひ〜して頭ばかりになり、「とつさんや、あ、痛い〜。」と泣出すと、親爺「それ見やあがれ、いつそ猫にでも食はしてしまへ。」

(「振鷲亭嘶日記」)

拾物

鰻と鰻が咄をして居る處へ脇指のひきはだを落して行く。鰻が拾ひしを、鰻「俺にくりやれ。」と云ふ。「おぬしは何にする。」「股引に。」「とんだ事を云ふものだ。八本の足を一本ばかり入れてもつままるまい。」「そしておぬしは何にする。」「蒲焼の時の火事羽織に。」「(「高笑ひ」)

* 旅行などの時にかぶせる刀の尻鞘。蓼肌革と稱するしほみ革で作るの
でひきはだと云ふ。

むきみ

『ばか〜〜〜』と賣つて來るを、『をい、ばか。をい、ばかよ。これ、ばかやい。』賣人やう〜聞付け、『はい、ばかはお前かえ。』を、俺だ。

〔仕方咄〕

* ばか貝の事。

鴨 其一

鴨水に遊び居るうしろから葱一手流れて行き、鴨の尻へ中りければ、鴨ふり向き『を、怖。』〔富久喜多留〕

鴨 其二

大勢の談に、殿様株に三日なつて見たいと云ふ。
 『俺は早く隠居になりたい。長坊は何になりたい。
 『俺か、俺は鴨になりたい。
 座中どつと笑ひ『何故。』

『はて甘いはさ。』〔富久喜多留〕

薺

『爰の朝顔は咲きますか。』

「まだ咲きませぬ。」

「さて遅いことだ。今咲かすば大方八月あたりでなくては咲くまい。俺が家の五月から咲きます。」

「五月から咲くが何早いものだ。俺が家の二月あたりから咲いて、其實が零れてあれ程になりました。」

「それが遅いといふのだ。俺が家の其五月から咲くといふも、實が零れてはえた二番ばえさ。」

「して又其零れた實の花は何時頃咲きました。」

「それはもう去年の九月あたりのことさ。」 (「氣の藥」)

菜 畠

亭主「私は菜がきつい好でござります。」と裏の障子を開けて見せれば、客「なる程青々と致してよい物でござる。」との挨拶に、亭主「あの向うに見えますも私の菜畠、こちらの畑も私の菜、あれ彼處に見えますも私の菜ばたけ。」と見せるゆゑ、「さてく澤山な菜畠、なぜ又此やうにおびた、しくお作りなされました。」といへば、「あれでも燂でますと僅少になります。」

(「氣の藥」)

若菜

「隣家から参りました。雑煮へ入れますから、どうぞお庭の摘菜をおくんなさいまし。」と毎日貫ひに来る故、あまりうるさく思ひ、或日此方からも何ぞ貰ひに遣らんとて、「これ小僧、隣家へ行て摘菜へ入れて食べますから、雑煮を下さりませと云つて来い。」(「春の駒」)

菜賣

雪降に七十ばかりの菜賣を呼掛け、「年寄のさぞ冷たからう。その菜は残らず買つて遣らう程に、早くしまうて休みやれ。」と錢四百文にて買取りしが、「こ

れ親爺、合力で、ろに買つたれども、是程はしかた無し。其方に遣る程に土産にでもしやれ。」と云へば、「それは一入有難う存じます。年寄の事なれば近邊の世話になりますれば、近處へ土産に致しませう。」とほくく悦び立出でしが、心變りして、いやく歸りがけに賣りませうと、隣町から「青菜、冬菜。」と呼びあるく處へ、初の亭主に出合ひ、「まあ此う云うて遊んだものさ。」

(「うちのもり」)

山椒

八百屋の店にある山椒を摘みて口に入れ、がりくと嚙んで、「ほ、う、こりや好い山椒ぢや。がうぎに辛い。是はならぬ。茶一つおくれ。」といふ内に、

向うの家で何か大きに騒ぐ。『何事ぢや。』と聞けば、『親爺さまが今二階から落ちられた。』といふ。『ほい、そりや見廻つて来ずばなるまい。』と直に走り、頬を窄めてすう／＼云ひながら、『親爺さまは如何なされた。』と問へば、『はい、今二階から落ちまして大怪我をいたしました。』『やれ、それは、すう／＼、ほう好い氣味だ。』(「聞上手」)

釣 其一

『俺は釣に出て金を五十兩釣つて来た。』といふ。『そんなら俺も出かけよう。』と品川沖へ出で、大きな鯛を釣上げ、鉤を抜いて海へ投げ、『忌々しい、汝ぢやあ無い。』(「茶の子餅」)

釣 其二

『船頭、爰はねつかから當らぬ。去年の何時か此處らへ釣に来た時は、大分よく附いた處があつた。』

『それはもそつと先でござります。』

『そんなら其處へやらぬか。』

『あい。』といつて三四十間漕いで行つて、『去年の處は此處でござります。』

『何か合點が參らぬ。』

『きつと此處でござります。』

『それならば河岸を衝きやれ。』

『あい。』といつて棹を立てれば、棹がづぶりと土の中へ這入る。『ありや、去年の穴。』
 『氣の藥』

釣 其三

『船頭や、今日は何故このやうに喰はぬ。』『されば合點が行きやせぬ。を、それく、今日は龍宮の夷子講で、魚ども残らず呼ばれて参りました。悪い日にお供申し氣の毒。』といふ内に、『何か掛つた。』と釣止見れば大金魚。『やれ、めでたい。』と是をしほに宿へ歸り、岡持の蓋を明くれば、潮さい河豚伸をしながら、『あ、大きに酔つた。』
 『いちのもり』

鼠 其一

鼠大勢あつまり、障子の棧へ上りくらすると、てんでに上つたり下りたりするに、一人の鼠上下を着るを、『お主は何故上下を着やる。』『おりやとのさんへ上る。』
 『今歳花時』

鼠 其二

『此頃俺が家へ鼠が大分出て困る。』
 『それは直に絶しやうがある。』
 『それはどうして。』

「まづ粉糠を善く煎つて餅糊とすりませ、山葵おろしの裏表へ塗つて棚へ上げて置くのさ。」

「それは厭勝かえ。」

「いえさ、さうして置くと鼠が来ては舐め来ては舐めして、後には尻尾ばかりになります。」（「氣の藥」）

聲 色

獨住の淋しさに眠られぬ上、意地悪い鼠が騒ぐ。猫は居ず、あんまりあたけ廻るゆる、寢處から「にやあん。」と云ふと、棚の鼠がちやんとちいゝかまつて動かぬ。これは能く仕たものと思ふうち、外の鼠が「これ、お主は何故其處に

居るぞい。」初の鼠が「爰へ来て面白い聲色を聞きや。」（「春みやけ」）

木 兎

「今日珍しい物を見た。」

「何を。」

「兩國の藥賣の處に生きた木兎があつた。」

「それが何珍しい物だ。俺は度々見た。木兎の生きたは随分見かけるが、達磨の生きたのが無いものさ。」（「氣の藥」）

* 藥賣（香具師）の店頭に人寄せの爲に置いた木兎。

土龍

「大根島の土龍を見たか。」

「わざわざ見に行った。」

「どんなものだ。」

「どうか栗鼠に似た物だ。」

「はてな、顔が似たか形が似たか。」

「されば何處が似たか知らぬ。」

「何の事だ。其やうな見様があるものか。」

「はて扱、俺が見に行つた日はさるお屋敷へ上つたといつて見ずに歸つたもの

を。

「それなら又栗鼠に似たとは何のことだ。」

「はて留守だから栗鼠に似た物だ。〔氣の藥〕」

* 昔湯島の地名。安永年中此處に出た見世物の中に土龍の藝をするがあつたと云ふ。

狼 其一

「芝の切通しに狼が百程出る。」

「とんだ誕をつくやつだ。」

「いや、五十程出る。」

「なに、誕を。」

「四五疋は丈夫に出る。」

「いや、途方も無い誕をつくやつだ。」

「いやさ、どうか出さうな處だ。」〔嘶の安賣〕三〇

狼 其二

御藏前へ狼が出て往來ふ人をむしや／＼と喰つては、がり／＼と齒にあたる物を柿の種のやうにふつと吹出し、又來るやつを喰つては、又がり／＼といふ物をふつ／＼と吹出して、「さて江戸の人は二朱銀で齒がたまるものでは無い。」〔氣の藥〕

百物語

五六人にて百物語を始め、段々しまひになり、最早一人になりし故、皆々夜着蒲團などを被り、小さくなつて居れど、悠々と落着き、煙草を呑み居るを皆々「談して消し給へ。」といへば、やう／＼と立ち、「用をたして來て消さう。」と、裏口の戸を開けければ、化物ども大欠伸にて待つて居る。

〔郭壽賀書〕

* 怪談をして百に満ちると眞の怪異が出ると云つたものである。

化物屋敷

何程の化物でも一攫にしてくれうと、夜すがら待つて居たれども何も出ず、烏がかあくくと云ふから、さらば歸らうと門を出て見れば、戸に張札「今晚はさる御屋敷様へ参り申し候。」（春みやげ）

饅頭

四五人集つて居る處へ瘦せた色のわるい男が片息になつて、がたくとふるへて来て、「後から饅頭賣が参りますが、私のはあの饅頭がどうも怖しくてなりませぬ。何處ぞへ隠して下され。」といへば、物置へ隠して置いて、悪戯に右

の饅頭を買つて、盆へ杉形に積上げ、物置の内へ入れて、戸をびつしやり閉て抑へて居るに、久しく過ぎても音も沙汰も無し。若し怖がつて死にはせぬかと開けて見れば、饅頭は残らず喰つて口なめすりをして居る故、「手前はあまり怖がつたから、威しに入れたが、さう喰つて仕舞つたのは、何處が怖いのだ。」といへば、「あい、此上は茶か二三杯怖うござる。」（氣の藥）

節分

「福は内、鬼は外へ。」と豆うち納めて酒飲んで居る處へ、門の戸ぐわらりと押開ける。見れば赤鬼なる故、豆を取つて打たんとすれば、鬼云ふやう、「これく、ちつとの内ぢや、置いて下され。今其處へ生酔が來ます。」「はて埒も無

い。鬼とも謂はる、者が生酔を怖がつて済むものか。出て行かつしやい。」「いやさ、さうで無い。醒めるとしやうきになる。」「口拍子」

ごもり

「今年の年男は吃音の八助、さぞをかしからう。」といふ内、八助は櫛を斜にかまへて大音聲「ふ……福は内、お……鬼は、お……鬼は……。」といへば、鬼が門口から覗いて、「これさ、出るのか這入るのか。」

聲の薬

立關がまへに金看板出して、「聲の立つ薬。」と書いてある。門口へ行きて、

「頼みませう。」といへば、大きな聲で「どうれ。」といふ。「もし、聲の立つ薬を下さいませ。あの今どうれとおつしやつた様に、聲が立ちますか。」と問へば、取次の男聲を低うして、「又此様にも申されます。」

寒聲

「お前は寒聲を遣ひなさつたけなが、立ちますか。」

「い、え、寒聲からして大分逆上せて困ります。必ず、寒聲は御無用く。」「何故え。」

「いやも、夜着を着て炬燵でやつた事だもの、たまるものぢやあ無い。」

〔春筈〕

鶏にはとり

聾者つんぼう春さき庭を眺めて居りしが、鶏時にはとりときを作るを見て人を招き、「いかさま永い日ひでござる。鶏にはとりさへ退屈したか、欠伸あくびをします。」
 (「高笑ひ」)

つんぼう

「やれ、すさまじい雷。」といふ中に、聾者つんぼうはきよろりくわんとして居る。側はたの人「大雷」と書付けて見せれば、「はてさて存じませなんだ。藝げいは身を助け
 るぢや。」
 (「高笑ひ」)

日待

日待ひまちに寄合ひ、大勢おほぜいにて色々談す。さまざまの話も盡きて、思ひくおもひに碁將ごしょう碁ご或は發句はつく合せなど始り、座敷ざしきも静しづかになる。中に剽勁ひやうきんなる男一人ありて、只騷たださわぐばかりにて何も知らず、つくねんとして居ながら座敷の隅を見れば、年頃としごろの男をとこまじくして居る。是好き對手おもしろいあてなりと思ひ、其男の傍へ行き、「お前まへも碁將ごしょう碁ごお嫌きらひと見えるから、なんと静しづかに睨にらみくらでも致さうかねえ。」
 「それは好ようござらう。」とて始めけるが、剽勁ひやうきんな男口を曲けたり、鼻はなを擧あげたり、頬ほをふくらかしたり、色々様々の事をすれども、毎も手前てまへばかり笑ひ、先の男は少しも笑はぬ故、よく顔を見ればあき盲めくら。
 (「笑長者」)

＊日の出を拜する爲に人々前夜から寄合ふこと。

梟かくらふ

「夜目の見える薬はあるまいか。」と人に聞きたれば、「それは梟の眼を黒焼にして目へ塗れ。」といふから、其通りしたれば、五六町さき迄晝のやうに見えたから、面白さに夜中歩行き、夜が明けると眞暗。〔今歳花時〕

座ざ 頭とう 其一

座頭、金は澤山あり、家は建てる、衣類はあり、食は美味い物の食飽き、何も不足は無し。是からどうぞ目を善くして見たいと願を起し、平常信心の神へ

千日参り、實にや信心空しからず、神も納受やましくけん、千日に満する日途中で目が明いた。其時の嬉しさ、天にも昇る心地して、見える程の物が珍しく、是は好しといつた處が、みんな知らぬ道で、跡へも行かれず先へも行かれず。暫く杖について思案し、きつと思付いたさうで目を眠り、いつものやうに歩行いて宿へ歸り、さて目を明けて、「お主が俺の女房か。」女房取あへず「始めてお目にか、りました。〔く、り猿〕」

座ざ 頭とう 其二

街中にて座頭の坊と竈祓はつたり行當り、竈祓の袂で鈴ががらくとなりければ、座頭驚き手を舉げて、「どろく。」〔聞上手〕

* 下級の神道者で、家々の竈の祓をして初穂を貰ひあるく人。

眼の玉

座頭、観音の寺内にて杖の先へ袂紗包が引掛り、探つて見れば丸きもの、「もし是を御覽なされて下され。」『是は景清が眼の玉と書いてござる。』座頭かの眼の玉を観音のお授けと戴き、おのれが眼へ篋めければ、不思議や眼明となる。折ふし向ふからお大名のお通り、かの坊主走寄り、「右大將頼朝やらぬ。」と、馬の轡へしつかと取附く。殿様仰天し給ひ、「比奴氣が違つたさうだ。」「いや、氣は違はぬ、眼が違つた。」「富久喜多留」

* 浅草の観音。

芝居

隻眼芝居へ行き、錢六十四文出しければ、『是では錢が半分足らぬ』と云ふ。隻眼『俺が錢を丸に出すのはからくりばかりだ。』〔噺の安賣〕三

* 覗きがらくり。

近眼

近眼の男開帳へ参る。『靈寶は左へく。』是は鎌倉の權五郎景政の鏡でござる。』男立寄つて丁寧に見る。『これく臭い物ではござらぬ。』

開帳

流行らぬ開帳、参りは少し、言立の坊様居眠をしながら、「是に立たせ給ふは當寺の本尊、聖觀世音菩薩、弘法大師一刀三禮の御作。又と開帳は叶ひませぬ。近う寄つて御縁を結ばれませう。」と云つて、眠を開き見れば一人も居ず。「もし、觀音さま。」「いちのものし」

手持無沙汰さに。

觀音 其一

「淺草の觀音堂は頼朝公の御建立で、梶原が普請奉行であつたけな。

「なる程、さういふ事だ。いかさま頼朝公の御普請でもあらう。結構な普請だ。時にあの矢大臣門は何故あのやうに曲けて建てたのう。

「はて、其處が梶原だ。」「猫に小判」

觀音 其二

如意輪觀音「良い年の暮でござる。お手前などは千のお手かござれば、さぞお手廻しも好うござらうが、手前などは甚だ不如意輪でござるから、頼杖ばかりついて居ります。千手觀音「いや、淺草などと違ひ、さてく困ります。

「それは何故でござる。

「されば、手は澤山ござれどもお足が無い。」「花之家抄」

大佛 其一

大佛様の眼の玉脱落ち、京大阪の者に直をつもらせけるに、千五百兩とつもの。江戸の者は二百兩と申して請合ふ。京大阪の者のつもりは、下にて大きな眼玉を拵へ、大層に足代を掛けて箆める工夫、江戸者の考は、こいつ脱落ちたもの故内に落ちてある筈と、内へ這入つて見れば、果して眼の玉内に落ちてある故、上へあけてまんまと箆める。京の者見物して、彼奴眼玉を箆めて己はどれから出居る。出處は無い筈と見て居る内に、鼻の孔より拔出でたれば、『ても扱も目から鼻へ抜け居つた。』(「猫に小判」)

大佛 其二

京の大佛困窮に及び、嵯峨の釋迦へ無心に行き、『さて我らつくなくと思ひますに、そこ許は形が小さうても人の用るがござる。我らは形ばかり大層で一向錢儲けが無く、さてく難儀いたす。近頃御無心ながら賽物の溜りがあらば、少々貸して下さるまいか。』『なる程お易い事ござる。幸ひ爰に四文錢で百貫文ほどござるから、御用立申ませう。』『それは千萬かたじけなうござります。』とて前巾着へ入れた。 (「太郎花」)

大佛 其三

大佛參詣の歸りに餅屋へ寄り、「此餅はいくらでござる。」

「三文でござります。」

「三文には大分小さいの。」

「はて大佛を御覽じた眼で御覽なされるから、小さく見えます。」

「いかさまさうであらう。」

と感心し、二足三足あゆみければ、道中に乗見あり。是は大佛様のおさづけ子と拾つて歸り、よくよく見ればはつち坊主。〔富久喜多留〕

* 京都方廣寺(大佛)の前に大佛餅と云ふ餅屋がある。

** 鉢坊主、鉢を捧げて米錢を乞ふ僧。

仁王

仁王へ紙を嚙みて吹付けると力が出ると云ふを聞き、若い者二三人づれにて誘引ひあひ、或寺の金剛へ滅多むしやうに紙を吹付けしが、一人ふところを捜しながら、「たつた今鼻紙を出すとて、つひ金を一分落した。」と云へば、連の者うろくあたりを尋ぬるに、仁王も首を振りながら身體中を見て、きよのよよろ。〔鯛乃味噌津〕

* 仁王の一體、金剛力士。

仙 人 其 一

心安い友だち仙人となりしに、一三十年ぶりにて山中にて逢ひ、昔語に時を移し、別れて歸る時、仙人「貴様に土産を遣らう。」と、小石に指をさせば、仙術にて忽ち黄金となる。友だち「私はあれは要りませぬ。」といへば、「それならばもつと大きなが欲しいか。」と又餘程大きな石へ指をさせば、又黄金となる。又「私はそれは欲しくない。」といふ故、「それならば何が欲しい。」と云へば、「私はお前の其指が欲しい。」〔氣の藥〕

仙 人 其 二

「仙人と云ふ者は三人に限つたものだ。」

「なに、手前たちが知るもので。」

「何故。」

「仙人は五人あるものだよ。」

「そんなら數へて見や。」

「それ、蝦蟇仙人。」

「よし。」

「鐵拐仙人。」

「よし。」

「久米の仙人。」

「よし、そして。」

「はて、めくら仙人、めあき仙人。」

〔今歳花時〕

十 徳

薬箱持の角介「旦那様のお召しなさる物は何と申すものでござります。」

「む、是か。是は十徳といふ物だ。譯をいつて聞かさう。坐れば羽織のごとく、起てば衣のごとく、五徳と五徳なれば十徳といふはさ。」

角介「感心つかまつりました。」

と隣家へ行き、「これ／＼おさんどん、俺が旦那の着さつしやる十徳の講釋を聞いたが、こなたは知つて居るか。」

「私は知らぬから談して聞かせな。」

「あれは起てば衣に似たり、坐れば羽織に似たり。」と少し考へて、「これはしたり。」〔花之家抄〕

八 艘 飛

「今日浅草で繪馬を見て来たが、善い手際な押繪があるはい。したが、あの義經八艘飛といふことは、俺はもうづんと解せぬ。義經が輕業師ではあるまいし、さう飛ばれるものではない。」といへば、老人聞いて、「いや、それは繪空

ごとと云つて、實は譯のある事ぢや。貴様たちは知らぬ筈、言うて聞かさう。あの八島の舟軍の時、教経殿は豪勢な人で、義經を見ると是非勝負をしさうにした。時に義經公は氣色を知つてよさうとした。それを合せて八さう飛といったものだ。〔聞上手〕

・天明の頃淺草の観音堂に押繪で八島の戰の圖を繪馬に仕立て、掲げた事があつたと見える。

鶴

鶴を知らぬ國へ鶴が下りて居るを見て村中寄合ひ、「あれ、めづらしい鳥が下りた。何といふ鳥だ。」といへど、一人も知つた人が無い。「これはお寺さま

で無くば知れまい。』と和尚を呼んで来て見せたれば、「は、あ、是は珍しい鳥ぢや。先づ頭が長し、脚が長し。あれで蠟燭をくはへると、とんと鶴ぢや。

〔仕方咄〕

・佛前の蠟燭立に眞鍮製の鶴がある。

梵 妻

旦那寺へ参り立關にて案内乞へども挨拶無き故、勝手へまはり覗き見れば、和尚銷を料理して居らるゝを、見付けられはてさぞ氣の毒がらるゝであらうと、又立關へ廻り、「頼みませう。』と大聲でいへば、やうく取次出て、「先づお上り。』と座敷へ通し、和尚も出で挨拶ありて盃を出し、二三杯飲む。『是は

何もお肴が無し。』といふ。『和尚様さうおつしやりますな。お樂みを存じて居る。是程お心易い私に何故お匿しなされます。』『むう、御覽じたか、是非に及ばぬ。これお富士、お心易いお方ぢや。出てお近付になりやれ。』

〔鳥の町〕

小僧

小僧お經を讀習ひ、なか／＼味をやれば、『讀みぶりが餘程巧者になつた。』と褒められ、『もし和尚さま、早く銅羅鏡鉢に合せて見たうござります。』

味噌

『豆腐い／＼。』

『豆腐よ、田樂にするから五挺ばかりくりやれ。これ三助、木芽田樂にしようから山椒を買つて來い。』

豆腐屋『爰に木芽もござります。』

『さて／＼氣の利いた商人ぢや。』

豆腐屋『お前さん、今時の商人がぬかつてなるものではござりませぬ。人が違ひます。』

三助『をつと、味噌は此方にある。』

〔花之家抄〕

こぶし

胡麻味噌を摺つて居る。「ちつと鹽梅をせう。」と拳を出す。

「いやだ。」

「そんなら此手を捻つて見ろ。」〔茶の子餅〕

ぶしやう親爺

あんまりじつとしてばかり居ては毒だ、ちつとまめにさせたいと、嫁が朝縁側へ出て、

「爺さま、あすこに月がござります。」

「なに、月がある。今日は幾日と、有明か。ちやうど其處に在らう。」

「もしく、庭の朝顔の初花が咲きました。御覧じまし。」

「なに、朝顔が咲いた。後に行つて見よう。」

「あれ、あの爺さまとした事が、朝顔は後には萎みますに。」

「もちつとして行つて見よう。」

「もしく、お大名がお通りなさります。」

「どりや、持つて来て見せやれ。」〔く、り猿〕

無性

摘菜賣呼込まれ、見ればぶつちよう面の男、諸道具を取散して居る故、怖い

男と思ひ、三文と云ふを十文が程置く。『それ程は要らぬ。少し置き。』といふ。『はて、他とはきつい違ひ。』といへば、『揃へるが面倒だ。』

〔茶の子餅〕

金 澤

駕籠より出て能見堂に上がり、『さてもく、絶景ぢや。駕籠の者、あれあの筆捨松の見事。なる程昔の金岡もあ、は晝かれぬとて筆を捨てたも無理では無い。』 駕籠の者『わたくしどもは箱根が昇きにくうござります。 〔飛談語〕』

駕 籠

『これ、駕籠の者、酒手をやる程に急いでくりやれ。』『はい、かしこまりました。』と急ぐ。なれども後より來たる駕籠先へ通りぬける故、客人大きに腹を立て、『急いでくりやれと云ふに、何故急いでくれぬ。見やれ、今の後から來たる駕籠が先へ行つた。』と熱くなれば、駕籠の者『旦那も野暮なことをおつしやる。あれは三人で昇ぎますから疾うござります。』客『なんと云ふ、三人で昇ぐから疾いと云ふのか。』 駕籠の者『さやうでござります。』客『待ちやれ、そんなら俺も出て昇がう。』

安物

「棒組があんまり氣ばるからに、昨日も一日乗人が無かつた。

「いや、さう云ふおのしが高ばるからぢや。何でも今日はかゝり合次第に負け
て乗せようぢや無いか。

「を、さうしよう。

と云ふ處へ、お邸方がござつて、

「駕籠が借りたい。こゝから淺草へ行つて、それから上野まで行くが、いくら
でやる。

「あい、二百五十下さりませ。

「それは高い、百ばかりでやらぬか。

「い、え。

「そんなら歩んで行きませう。

「これ棒組、あんまり安いが負けてやるか。

「を、何でも乗せろく。もうしく、負けて参りませう。

「ふう、淺草から上野かけて百に負けるのか。

「あい、負けて上げませう。

「そんなら乗らうか。

と駕籠に乗りながら、

「なんと、これは盗みものでは無いかよ。

（「話問内」）

* 武家の人。

四萬六千日

輕子が連立つて行きながら、

「棒組く、二百十日たあまあ何のこつたらう。

「手前ありよう一つ知らねえか。

「此年まで知らねえよ。

「先づありやあ此うと、あの節分のおくる日を立春といふは。好しかそれから二百十日めの事さ。

「はてな、そりやあそれで可し。四萬六千日たあな。

「はて、それもおんなじ事さ。〔く、り猿〕

都鳥

日備取二人づれにて隅田川の邊を通る。

「これ平坊や、おのしはちつと物をも嚙別ける男だが、あの浮いて居る鳥は何といふ鳥だの。

「あれか、ありやあ都鳥さ。古歌にも讀んである。

「ふう、そりやあ何といふ歌だの。

「名にし負はばいざごさ問はん都鳥。是が即ちいざごさの始りさ。

〔千里の翅〕

大八車

女の子どもはちよつと寄つても口まめ。

「お前の父様は毎日車を曳いて何處へ行くのだ。近い處へばかりかえ。

「いえく、遠くへも行きやす。

「それでも、それそこだくといはつしやるでは無いか。

「何さ、あれは車を欺すのさ。〔茶の子餅〕」

新参

「八助やい、源左衛門殿へ使に行て来い。」「はい。』というて走けて行く。『彼奴は口上も聞かずに使に行つて何といふであらう。龜相な奴ぢや。』といふ處へ歸る。』八助、われは口上を何というた。』「いや幸ひお留守でござりました。

〔飛談語。〕

芝居くづれ

「今からぶら／＼兩國へ納涼に行かう。』と誘引ふ。『それは好からう。併し芝居くづれの人が邪魔で、歩行きにくからう。大かたもう崩れたらう。ちよつと

見せに遣らう。』と山出し男を呼んで、「芝居が崩れたか、見て来い。』と言付ける。暫くして歸る。

旦那「どうだ、崩れたか。」

家來「いえ、見物の人は皆外へ出ますが、まだ何處も崩れは致しませぬ。」

〔笑長者〕

*芝居がはねて見物人が雜然と出て來ること。

途 中

隣町まで今迄か、るとは、きつい隙の取れやう。

「いや、お聞きなされませ。参る向うから人が來て行當る。避ける方へついて

避けるので、大きに手間を取りました。

「はて、われは鈍な者だ。すべて法があつて、左へ避けるものだ。」

と教へられ、又使に行く。心得て左へ寄れば、向うも避けるに、「貴様は下地があるはえ。」〔茶の子餅〕

打 擲

神職の備中が家來、町にて喧嘩、した、か叩かれ踏まれ、大童にて歸る。朋輩齒痒がり、「何故備中家來だと名のらぬ。』「されば、おれも油断は無い。精出して備といへば踏まれ、備といへば叩かれ、ちうの音もあがらぬ。」

〔飛談語〕

律義

「今年置いた久助めは律義者ぢや。あんな者は少い。」と云ふ處へ久助罷出で、
 「もし、旦那様、私が國から持つて参つた金が一分ござります。之をお前様に預けて置きたうござります。」と云ふ、それは奇特ぢや。店の番頭へ持つて行
 て預けたが好い。『いえ、私はお前様に預けたうござります。』『そりや
 又何故に。』『あい、お前様の辛抱を見届けました。』

香の物

「お寺から少しながら漬物を上げますと申して参りました。」と取次の男が差

出せば、「いや、是は好い匂ぢや。お寺ではどうして漬けさしやることやら、匂
 なら風味なら如何も言へぬ。」といへば、「あい、私が春中もお使に参つた時
 勝手に見ましたが、久しく漬けて置きますさうで、重しの石に年號が彫付けて
 ござつた。たしか永祿二年八月五日とござりました。」(鳥の町)

* 此年號の銘のある石塔を重しに使つたのである。

綿屑

小僧が「もし旦那様え、お前の肩に虱が居ります。」と摘みて取れば、「こり
 や、莫迦つつらめ。そんな事を大きな聲で言ふものぢや無い。」と叱れば、小
 僧聲を低くして、「はい、これは綿屑でござりました。」(聞上手)

丁 廝 其 一

「俺が親方は人づかひの悪い人、日がな一日供に連れて歩行き、歸ると使にやる。大方用をしまつたと思へば、手習をしろとぬかしをる。」（「いちのもり」）

丁 廝 其 二

丁廝火を焚きながら大吹竹の孔を指で抑へ、無性に吹いて居るを、旦那が見付けて、「これ又や、孔を抑へては風が出ぬは。」と叱れば、「かう吹込んで置いて手を放します。」（「太郎花」）

行 燈

「長吉よ、用がある。早く来い〜。」「あい。」といつて走出す拍子に行燈へつ、か、れば、燈蓋が落ちて眞暗がり。親爺腹を立て、「何時でも〜わがやうな蠢用な奴は無い。」と叱れば、長吉ふくれ面して、「せんたい此様な暗闇に置くが悪い。」（「千里の翅」）

* 油皿。

雪

「小僧よ、庭の雪はどれ程積つた。物さしでさして来い。」小僧口小言を出ひ

くさして来る。『どうだ知れたか。』『あい、深さは一尺と五寸、幅は知れませぬ。』(「みになる金」)

五匁五分

呉服屋へ買物を取りに行き、直を問へば五匁五分といふ。『面倒ながらちよつと書付けて下さい。』といへば、手代がいふには、『まあ、持つて行つて見せてござれ。五匁五分が覺えにくくば、それ指を折つて五匁、又此方の指を折つて五分と覺えてござれ。』といへば、『よし、吞込印』と兩手を握つて立出でしが、又立歸り、『これく、どうぞ是を二分負けてくれまいか。』『何故え。』『これでは戸が開けられぬ。』

厄拂ひ

『御厄拂ひ、厄落し。』と呼ばつて来る。『これく、厄拂ひどの、頼んます。』と、紙に包んで渡せば受取つて、『やあら旦那の御壽命申さば……』『をつと待つたり。旦那のでは無い、俺がのだ。』

重箱

『旦那只今歸りました』と使の返事をいへば、旦那風呂敷を解いて、『此重箱の蓋は如何した。』

『はい、無くば落したものでござりませう。』

『大放心め、唯持つてあるいても落すことでは無いに、風呂敷に包んだ重の蓋を落すとは呆れもせぬ。』

と以ての外ほかの叱り、八助旦那にした、か小言を言はせてしまつて、『あ、あの重箱の蓋を拾つた奴は嘸ま不自由であらう。』(「氣の樂」)

禮者

初春年始の禮の供に、至つて物忘れをする三介を連れて挾箱を持たせけるが、度々先々へ置忘れては取りに立戻る故、道はか行かず困りはて、是非無く挾箱持を先に立たせ行きけるが、折ふし先箱の大名衆通りか、りしを見て、三介、『もし旦那、あの人も忘れるさうでござります。』

* 挾箱は通例行列の後部に在るのであるが、家格の高い大名は先に立たせる事を許されて居る。之を先箱と云ふ。甚だ高格の大名のは挾箱に金蒔繪の紋を附ける。之を金紋先箱と云ふ。

筵

友だちの處ところに四五人咄して居る處へ、『新五左衛門お見舞申す。』と座敷へ通れば、亭主『あの客は今に歸るから、皆遊んで居たまへ。』と、座敷へ出て咄して居るに、何時までも歸らず。次の間の四五人『さて長い客だ。早く歸したい。』と筵はうきを尋ねれども見えす。一人が庭へ下りて竹筵を見付け出し、『こいつが良い。』と紫垣へ逆さまに立て、置くと、程なく客立關へ出る。『そりや

簾が利いた。』と嘯けば、客供の男を呼んで、『われは先へ歸れ。』〔氣の樂〕

* みご製の座敷簾であつたら主人に利いたらうが、竹の庭簾であつたので下人に利いたのである。

道樂者

『太平樂指南所といふ看板が出たから、俺あ行かうと思ふが、わりや行かぬか。』

『を、そりや氣がある。』

と家樽を持つて行き、『頼みませう。』といへば、『是は好うお出なされました。先づ暫くお控へなされませ。』と云うて内へ這入り、待てど暮せど何の沙汰も無き故、大きに腹を立て、『こりやまあ途方も無い奴だ。のろまが感陽宮の城を預

つたやうに、何時まで斯うして置きやがる。』との惡體。奥より障子を開けて、

『餘程お下地がござります。』〔鳥の町〕

* 朱漆塗の飾樽、祝儀に使ふもの。

** 感陽宮は秦の始皇の宮殿。燕の使者荆軻秦舞揚參内の時宮門で取次を乞ひ、久しく其處に待たされた後、やうく奥に入ることを許された事に聯想して云ふ。

雷嫌ひ

至つて雷嫌ひの俠客ぶら〜と納涼に出でたれば、俄に空かきくもり稲光すさまじく、ぐわら〜〜〜びしや〜〜と今にも落ちかゝるやうに鳴渡れ

ば、俠客眞青になり、逃げたいにも逃げられず、大道へあふむけにふん反返り
天を睨みて『どうでもしやあがれ。』（壽々桑羅井）

鳶先生

きほひ組二人づれで遊びに出でけるが、

『これ八や、ちつと待つてくれろ。俺は爰の旦那衆から好い物を貰つたから

ちよつと禮に寄らすばなるまい。

と八を門口に待たせ置き、内へ這入つて、

『はい、權でござりやす。きのふはお忝うござりやす。お禮に参りやした。

あい、おかみさんへも宜しう。

と言捨て、門へ出れば、

『これ、權や、今聞いて居るに、おのしやあまあ物の言ひ様も知らねいの。

『何故さういふ。』

『はて、旦那衆へきのふ杯と云ふは横柄だによ。重ねてもあるもんだ。きのふ

と云ふ事を慇懃に云はうならば、昨日とさ。まつと慇懃な處では一昨日は有難

うござりますと。（聞上手）

婚禮ぶるまひ

仕事師婚禮ぶるまひに招かれ、支度をして出掛ける處へ友だち來り、『おのし
やあ歸る時の詞を知つて居るか。』『いや、知らねえ。教へてくりやれ。』『必ず

な御暇申すの、歸りませうのと言ふことは禁物だ。』『そして何と言ふべい。』
 『開きませうと言ひやれ。』を、呑込山だ。』とかの座敷へ行き、鯨のけん
 の九年坊までしてやり、膳が引けるや否や痺をきらし、『御亭主さん、私やあ駈
 落いたしやす。』〔ちがひないまん中〕

*「けん」は「つま」などいふ意か、今不詳。

敦盛

鳶の者寄合ひ、『なんと、あの一の谷で熊谷と敦盛と切つたり拵つたりやらか
 したが、其折なぜ敦盛は取つて返した。俺ならば委細構はず逃けて行くのに。』
 と云へば、『それはお身さんの言ふ事だが、敦盛も熊谷とは思はなんだのさ。何

か跡からやれ〜と呼ぶから、手拭でも落したかと思つて。』〔鯛乃味噌津〕

仕事師

仕事師晝休に歸り、晝寢して目が覺め、少し寒くなり、『嬢あや、寒くなつた
 が、何ぞ掛ける物は無いか。』といへば、かみさんが裏の方で、『其處の柱に折
 釘が打つてござります。』〔花之家抄〕

鳶の者

友を呼び、『新宅だ。見てくりやれ。』
 『む、好く出來た。桝を竹でした處がどうも云へぬが、節を抜いたか。』

「いや、抜かぬが何故だ。

「焼ける時跳ねてわるい。〔茶の子餅〕

移 徙

新宅へ悦びに来て見れば入口無し。格子を覗いて、「御亭主さま、入口は何處でござります。」『あい此方へ。』と家をぐるりと廻らせて、奥の隅に二尺程の窓。『ここ、からお這入りなされ。』『さてく、是程大層な御普請に是ばかりの入口とは、餘り御不自由でござりませう。』『いえく、私は是も付けまいかと存じました。〔いちのもり〕

雷嫌ひの家

雷嫌ひが金にあかして家を建て、「どうぞ雷の用心、善い工面を。」と云ふ。或人聞いて、「それは天井に鐵の網を張り給へ。何の造作も無くて好し。たとへ落ちてても細になつて落ちるはさ。」〔話問内〕

土藏の腰卷

「お土藏が立派に善う出来ました。時に此腰卷は途方も無い高さ、いかさま五尺ばかりでござりませう。」

「なる程五尺五寸でござります。」

「世間のは大概二人恰好、何故あのやうに高くなされました。」

「さればさ、惣體並間を見まするに、とかく焼残る物は腰巻でござる。」

（「いちのもり」）

紙帳

ことの外近くに火事あれば、亭主紙帳を吊り、悉く諸道具を其中へ入れければ、女房氣の毒がり、「お前其紙帳は何の爲に吊ることぞ。此急な火事に。」といへば、「喧しい、黙止つて居ろ。火事に土藏と見せるのだ。」

（「壽々葉羅井」）

吊棚

「此中貴様に吊つて貰つた棚が落ちて大きに困つた。あのやうな粗末な事をして。」と云はれて、「はてな、落ちる筈ぢや無いが、それは大かた何ぞ上げたであらう。」（「鳥の町」）

立合

「なんぼ柔術の兵法のと云やつても、誠の大力に逢うては叶はぬ。まあ俺などが手にさはるが最後、兵法でも牛若でも身動きもさせぬ。」との高慢、近處の兵法師の弟子が聞いて居て腹を立て、師匠の處へ行き、「先生かやうくの事を申

します。悪い奴でござる。』といへば、『へ、千人力を一人で打つて締るのが兵術。そんな事いふ奴はちと締るが可い。連れてござれ。』といふに、弟子どもいきり出して、やがて角力取を連れて来て立合せたれば、やがて師匠を一度攫にしてぐつと指上げ、『なんと如何だ。今打付けると微塵になるが、復び口を利くまいか。』師匠落着拂つて、『こ、が術だ。其打付けられる時に當身の手練。お主が首はころり。さあ遠慮無しに打付けろ。』角力取是はひよんな事をしたと、打付ける事もならず、そつと降すは猶いやなり。せうこと無しに指上げたなりで、『やれ、人殺しく。』〔今歳花時〕

相 撲

現金屋の番頭角力好にて、見物に行きこたへられず、『一番取りたい。』といへば、相應な對手を出し取組ませけるに、物の見事に勝ちければ、行司『只今の勝角力飛入現金懸直無し。』と團扇を揚げる。見物の者『道理で負けねえ。』

〔芝之家抄〕

釋迦が嶽

角力取寄合ひ、阿彌陀の光をした處が、釋迦が嶽使の役に當り、是非無く暗闇を四つ過に豆腐を買ひに行き、力に任せて戸を叩く。亭主眼をさまし、『二階

を叩く奴は誰だ。

豆腐屋

夫婦暮しの豆腐屋ありけるに、二人ながら無筆なり。されども女房覚えが善く、『もし、一挺おくれ。代は後から。』『あい、向うの伊勢屋へ一挺。』といへば、女房『をい、可し。』といふ。間も無く伊勢屋から『只今の一挺の代。』と持つて来れば、亭主『これは御近答。それ、今の一挺代濟みます。』女房『をつと、忘れたり。』

忘れ

『今日は幾日か。』

『されば幾日か知れぬ。暦を見たら知れよう。』

『はて、暦を見たとして知れるものか。』

『待ちやれ、今何處ぞから手紙が来よう。』 (「春侘」)

記憶

ある人記憶の弟子入して悉く傳授を受け、『又明日参りましょ。』と門口へ出か、り、『これ御家来衆、俺は何方から這入りましたの。』 (「春みわけ」)

七ころび

門前の石で蹴躓いて轉び、あたりを見て起きしが、二三間行つて又轉び、「思
なしい。この位なら起きねば好かつたに。」（春唄）

焙烙

「焙烙やノ」。炭消しや雛の竈。

ある家からかみさまが出て、「これく、焙烙見せさつしやい。いくらぢやえ。」
「あい、一枚でしまひ、十六文でございます。」「お、あの人。しまひなら
十文にさつしやい。」「いえ、懸直は無し。」と荷へしまひ、擔いで二三間行く

と、かの焙烙すべり落ちて微塵になる。かみさまが見て居て、「お、仕合せ。
よくぞ買はなんだ。」（聞上手）

鍋屋

「私が鍋は請合つて上げます。これ御覽じませ。」と兩方の耳を持つて抛け
て見せるに破れず。幾度も抛けて、「これ此通りでございます」といふ時、鍋さつと
二つに破れる。「これ、是をば上げませぬ。」（氣の藥）

木綿屋

「木綿屋どん、拭手地を見せな。」と、絞の切地をあてつ較べつして、「二尺切

るによ。」と鉄と物さしを持つて出れば、「これく、私が切つて上げませう。鉄で切られては後が微塵だ。」と手前の物さしで二尺さして、腰から小刀を出し、折目を口に啣へてついと切れば、「をやくけしからん。鼻の先を大きに切らした。それいつそ血が出るはな。」といへば、木綿屋「それ見なさい。鉄で裁つてはほつても此うはいかぬ。」〔氣の藥〕

井戸掘

類焼について田舎から井戸廻、仕事師、大工など大勢来た故、深さ五六丈の井戸をつもらせたれば、「金子一兩で掘りませう。」といふ。安いものぢやから誂へたれば、庭へ川のやうに長く掘る。「さうでは無い。井戸を掘るのぢや。」

というたれば、「かう掘つて押立てます。」〔口拍子〕

火の見 其一

「貴様は火の見櫓の番をなさるから御功者であらうが、是から眞崎稻荷へはど
う参るかようござらう。」「眞崎へお出なさるには、先づ此土蔵の角から淺草見
附の鯨銚を右へ取つて、観音の塔の九輪へ突當つて、少し右へ、瓦煙のうしろ
さ。」〔氣の藥〕

* 隅田川の右岸眞崎に在る。

火の見 其二

今夜はどうか小氣味の悪い晩と思ふ處へ、案に違はず鼻の高い人が羽團扇を持つてずつと來り、「これ番人、俺は鞍馬より秋葉へ使の天狗なるが、其方どもは此處にて何によらず見たり聞いたりせし事を言ふまいといふ誓詞をして勤めると聞いたが、違ひは無いか。』「なる程仰の通り相違はござりませぬ。』「いよいよ相違無いな。』「はい、さやうでござります。』「そんなら四文錢一本貸してくりやれ。』「春の駒。』

途中

國者に途中で逢ひ、「さて久しぶり。』と互の無事を語り、「俺もお邸へ仲間奉公に這入つたが、お見立に預り、づつと立身して、家中の者を下目に見るやうになつた。』「それはめでたい。そんなら御側か御用人か。』「いや、火の見番。』「いちのもり。』

君公の身近に仕へて日常の用務に従ふ役人。

凧

通り町にて凡そ百枚張程の凧を揚げけるに、猿にはどうぞ人を遣つてみたい

ものと云ふ。をりふし宿無し通りか、り、『どうで此形では正月も出来ず。直
 が善くば猿にでも行きませう。』『そんなら一分で猿に行くか。』といへば、『理
 金に下さりませうなら行きませう。』と慾深く前金に取り、その儘猿になりて行
 けば、段々昇る程怖くなり、やう／＼と糸目の際へ近づけば、大風しきりに吹
 来り、風の糸目よりふつと切れ、何處とも無く吹かれ行けば、をりふし天狗殿
 日光指して飛行けば、件の宿無し跡につき、『これもうし旦那、お助けなされて
 下さりませ。』といへば、天狗ふりむき『附くなく、戻りに遣らう。』

〔いちのもり〕

* 猿又は奴などの形を紙で造り、之を風の糸に通し、風の揚るに随つて
 此紙形も糸に沿うて上るやうに仕掛けた物。格別の大風故此猿を人間

でやつて見ようとするのである。

** 乞食と思做して云ふ。

宿 無 し 其 一

宿無しふらく歩行く。向うから仲間が来て、『どうだ。四五日逢はなんだ。
 見れば大分色が悪いが、どうぞしたか。』をよ、さん／＼だ。第一食物がま
 づくてならぬ。』『それは困つたものだ。何ぞ口に合ふ物を貰つて食やれ。』

〔いちのもり〕

宿無し其二

宿無しを大勢捉らへ佐渡へ遣られる。中に若い男一人ことの外喜ぶ。

お役人衆「これ、われは何故喜ぶ。

「はい、お蔭で生國へ歸りますのが嬉しうござります。〔笑長者〕

* 佐渡の金山で勞役に使ふ爲に重罪人を同島に流す事は殆ど江戸時代を通じてあつた。爰に宿無しとあるは罪科ある無宿者の事であらう。

薦かぶり

薦かぶり三人あつまりてお餘りを分けて居る處へ、花胡蘆を着た非人來か

かりて、「はう、みんな好い物をしたな。俺にもちつとくれの鐘。」「を、長か。爰へ來う。ひやあ、わりや力んだ物を着たな。」「を、さ、今拾つたが、ちと派手過ぎる。

錦

薦被が古郷へ歸らんと志し、支度して出掛ける向うへ、仲間のお薦が來か、り「お主は何處へ行くぞ。」「をう、國へ歸る。」「それにお主、その花胡蘆一枚では寒くてなるまい。俺が着て居る此薙錢別に遣るから着て行きやれ。」「莫迦言ふな。薦が着られるものか。古郷へは錦だはい。〔今歳花時〕

天 秤

兩替町を母乞食が先になつて、『坊主早く来い。そこに何を見て居る。』天秤を叩くに見入りて、『俺はあれが面白い。』母乞食『面白くは、其處の子にくれるぞよ。』(「飛談語」)

* 昔兩替商の多くあつた處、兩替商は資産家なること勿論である。此話の結末が振つて居るのは其處に在る。

無 宿 の 帳

途中にて帳面を拾ひ表書を見れば、『行倒れの覺』と書いて、傍に『病人無宿』

と記したり。是は珍しいと開けて見れば、

何月何日中橋へたふれ候節

ひやめし八杯

古ぬのこ一つ

何月いつ日麴町へたふれ候節

やきめし七つ

錢二百文

何月何日青山にて倒れ候節

灸ばかり (「聞上手」)

滴酒

乞食、茶屋にて滴酒を面桶に一杯貰ひ來り、道端にすわり、前に置き飲まんとせしが、其昔捻上戸ゆる一人飲んでは旨からすと、案じ居る處を、奴の供歸りを見つけて、『もし奴さま、お願がござります。』『なんだ。』『私その昔は大の捻上戸でござります。只今此酒をぐつと給へては旨からず、憚ながらそれ食へとおつしやつて下さりませ。』『それを飲め。』『乞食、之を食へまするとお座にたまりませぬ。』『はて、ぐつと飲め。』『乞食、それは御無理でござります。先刻の一盃さへやうく食へました。もうこれ御免なさりませ。』『そんなら此方へよこせ。』と、奴ぐつと飲む。〔飛談語〕

甘酒

仲間寒き夜に使に出で、向うから甘酒賣來る。さらば一杯奢らうと、煙草入の錢をかぞへて見れば、たつた五文あり。一文の不足はちよろまかさうと、甘酒賣を呼び一杯引掛け、『さあ錢を拂はう、手を出し給へ。それ一文、二文、三文、何時であらうの。』『四つでござります。』『五文、六文。〕〔富久喜多留〕

鐘持

233
さるお邸のお使者、馬に乗つて供廻り美々しく召連れられしが、鐘の鞆がたがたと鳴る故、馬上より振返り、『鐘の鞆を落すなよ。』と言付け、又振返りては

「鐘の鞆に氣を付けよ。」『落すなよ。』と幾度も言付けて行きけるが、振返りて見れば鐘の鞆無し。侍大きに腹を立て、『あれ程氣を付けたに不届千萬。』と叱れば、鐘持が云ふは、『餘り御苦勞になされますに依つて、鞆は懷中致しました。』

馬嫌ひ

遠乗のお供を仕れと度々の御意、此度はさうく虚病も構へられず、是非無く乗つて出るや否や、此馬車に驚いてむしやうに駈出す。久平死身になつて鞍坪へかぢり付いて行く向うへ、近付の男來かゝり、馬の上へ聲を懸けて、『これは久平どの、何方へお出なされます。』

『されば此分では何處へ行かうも知れませぬ。』 (氣の樂し)

落馬

二人つれだつて櫻の馬場へ行き『さあ借馬に乗つて見ようでは無いか。』といへば、『こりや面白からう。したが俺はつひに乗つた事が無い。』『さて靜に乗つて見やれ。』と無理に乗せて引出す。『これは怖いものだ。』とも、尻になつて乗つて行く。引返すと馬は一散に駈出す。『あれく、どうもならぬく。』といふ内に、馬場の中程でころりと落ち、『あ、是で好い。』

* 櫻の馬場は一に御茶の水の馬場と云つた。今の御茶の水橋に近く、櫻楓が澤山にあつて春秋の頃は佳景であつたと云ふ。此馬場は江戸時代

の初から存して居たらしく、水戸の光圀公が幼時小石川の邸から此處へ来て調馬をしたと云ふ話がある。

●馬上で尻のすわらぬ事。

悪い癖

心易い者によく家來を叱る人あり。ある時來りて『晩には皆が來る筈ぢやから、何も無いが貴様も來て談し給へ。』といふ。『それは忝いが、貴様は人が行くと、よく家來を叱る人ぢやによつて行きにくい。』『されば俺もたしなむけれど、どうも叱りたくてならぬ。悪い癖ぢや。したが、もう晩には叱らぬ程に來てくれ給へ。』といふ故、『そんなら行かう。』と約束して話に行きけるが、

案の如くやたらに家來を叱る故、客衆みなく、氣の毒がり、『その様に叱り給ふなら、皆お暇申さう。』といへば、亭主も困り、『そんならもうどの様な事があつても叱るまい程に談し給へ。』と留めて談させけり。暫く過ぎて、亭主も家來も見えねば、『是は不思議。』と裏口を覗いて見れば、亭主家來を捉へて肩先へ喰付いて居る。

亭主

小道具屋の店へお侍が來て、『こりや、此徳利はいくらぢや。』『はい、それは本備前でござります。五百文にして上げませう。』『それは高い。ずつと負けてくりやれ。』『いえ、もう引けはござりませぬ。』『ふう、亭主は留守か。内に

なら負けてくれよう。手前では埒が明くまい。』といへば、『はい、いや私がすぐに亭主でござります。其様に懸直はござりませぬ。』『なに、嘘を言へ。この亭主ではあるまい。先度見た時二百に賣らうというたもの。そちは亭主ではあるまいがの。』といへば、『いや、亭主に違ひござりませぬ。』『いやいや、亭主ではあるまい。』といふにぞ、亭主赤面して大きに焦き、かの徳利を庭へ打付け微塵になして、『さあ、何と是でも亭主でござるまいか。』

〔聞上手〕

湯屋の喧嘩

侍風呂の中で喧嘩を始め、『これ亭主、喧嘩の對手を出せ。』亭主『もう風呂へ

には誰も居りませぬ。』といへば、『なに、居る筈だ。』と、又裸になり風呂へ飛込み、『湯番笈を貸しやれ。』〔ちがひないまん中〕

編笠

侍 不斷編笠を被つて歩行く。

朋輩 『貴様編笠はもう止しやれ。留守居のしくじりの様で見苦しい。』

『貴様の異見は忝いが、俺も遠き慮あつて被る。』

朋輩 『そりや又何故。』

『武士の身の上は知れぬものだ。若し浪人した時の爲だ。』〔笑長者〕

・大名の役人で他藩との交渉に任ずる者、交際掛として華やかな生活を

なし、市井の間にも名を知られて居る故、過ありて失職する時は、世間に顔を見られるが恥しいとて編笠を被つて、忍んであるきさうなと想像して言ふ。

臆病武士

大臆病なる侍夜うらへ行くに氣味悪く思ひ、内儀に手燭を掲げさせ行きしが、「なんと、そなたは怖くは無いか。」といふ。「なんの怖いことがござりましょ。」といへば、「さすが武士の妻ほどある。(鳥の町)」

井戸替

長屋中寄つて井戸替をするに、相店の浪人衆出ずにも居られまいと罷出で、「身どももお手傳申さう。」といふ。「又御浪人さまか。結句邪魔にならう。」と迷惑ながら、「もし、そんならお前様は爰へお出なさつて下さりませい。」と綱の先をあてがひ、「それ曳いたりよ。」と聲を掛ければ、浪人四角になつて、「然らばお先へ。」

綱右衛門

渡邊の綱右衛門といふ浪人あり。近處の衆打寄り、「お前さまは名に負ふ四天

王の随一、鬼の腕を切らしやりました綱さまの御子孫と承りました。どうぞ御先祖の功名ばなしを聞かせて下され。」といへば、綱右衛門仔細らしく「なる程我らは源の頼光の御内渡邊源次綱が末葉でござる。申すもここがましく候へども、只今繪馬や幟に形を残されしは、かの洛陽九條の羅城門に鬼神棲んで往來を惱ませしに、我先祖渡邊の綱、君の仰を蒙り、印の金札たまはりて、五枚兜を猪首に着なし、羅城門に急ぎ行き、馬よりひらりとおりしも五月の宵闇に、かの金札を立て置きて立歸らんとする處に、悪風しきりに吹來り、鬼神は腕をさし出し、綱が兜の鏝をむんずと掴んで後へ引く。綱もさる者、身を脱れんと前へ引く。互にえいやと引く力に、鉢附の板より引きちぎつて、左右へばつとぞ退いたりける。」これく、もうし、それではどうやら八島の軍のやうにござります。」

「さればく、その間違ゆる身も浪人いたした。」

せんばう

浪人松魚賣を呼び、「其松魚價は何程ぢや。」

「あい、そくがれんにして上げませう。」

「何の事ぢや、通辭の要らぬやうに鳥目で言へ。」

「そんなら百八十にして上げませう。」

「やれく、よく嘘を言ふ奴ぢや。たつた今百五十ぢやと云うたでは無いか。」

〔茶の子餅〕

*「せんばう」下層社會の隠語で二枚舌などの意であらう。語源不詳、今

は用ゐられぬ。

*** 百五十文の隠語。

人 蓼

「さてく、人蓼の力はすさまじいんだのう。

「それを貴様今知つたか。

「さればさ、先度隣家の浪人どのが瘡をふるうて久しく落ちこぢれて弱り切つて居る處へ、醫者どのが来て、これはもう人蓼を二分づ、も用ひずばなるまいと言はれたを、かの病人が聞くと、吃驚して直に瘡が落ちた。〔話問内〕

切 腹

浪人暮のしまひに困り、先づ大屋へ行き店賃のことわり。「いやく、平生とは違ひます。此暮は待たれませぬ。」といへば、「そんなら爰で腹を切ります。」と押祖げば、腹に十文字の墨打してあり。大屋も呆れ、「そんなら春まで待ちませう。」「それはお聴濟み 忝うござる。」と墨を一筋消す。「もし、横の一筋が消えませぬ。」といへば、「是は米屋で消します。〔「嘶の安賣」二〕

浪 人 其 一

智者も惑ひ勇者も恐れるは金と云ふ一物、軍があらば一廉の大名にもならり

に治世に住みて残念といふ程の浪人、今年も才覺につまり、さる金持の處へ仕掛け、色々口説けども、「いやはや、當暮は此方にも繰合せ悪しく、世間が類焼後ひしと差間へて動かぬゆる、一向御相談が致しにくい。」など、とつても付かぬ挨拶にせん方無く、浪人者「然らばお座敷を拜借致して切腹仕りた

い。」と古い臺詞を言出せば、亭主「氣の毒ながら此暮はまあさうでもして御寛じろ。(千里の翅)

浪人 其二

浪人「なんと、上白があるか。

米屋「あい、随分米は佳うござります。

浪「相場は。

米「兩に八斗いたします。

浪「それが極良いのか。

米「上無しでござります。

浪「それならば冷飯を出しやれ。ちときいて試よう。(氣の藥)

* 味を試みる事。「冷飯を」と云つたのは些遠慮した氣味。

劍術

「六郎く、貴様あ日比きつい高慢だが、此中見れば半十に大きにしつけられたな。」

「なに彼の半十に。」

「言やるな。俺は見居た。」

「負けは負けたのさ。」

「貴様より半十が上手だな。」

「なに、彼奴は一向習ひが無い」

「それに何故貴様負けたらう。」

「されば此方からは流義を守つて法を立て、斯うした時は斯う、斯うした時は斯うと締く、りをしてか、れば、先からは習ひも無くつて、無法にこぢつけるからたまるもんぢや無い。(く、り猿)

黒人

柔術の指南所で稽古最中『やれ、隣町で喧嘩がある。』と騒ぐ。師匠殿おつとり刀にて走行き、暫くあつて眉間に大疵を受けて歸る。弟子ども『是は先生どうなされた。』と問へば、『されば、大工童と酒屋の御用との喧嘩でござつた扱ひにか、つて見ましたが聞分けぬ故、さらばめてやらうと存じたに、つひ此様に打たれました。』『これはしたり。先生のお詞とも存ぜぬ。武士と武士のお立合ならばまだしも、大工童にとは餘りしい。』といへば、先生眞顔になつて、『さあ、そこが先方が素人だ。(聞上手)』

柔術

「侍といふ者は心掛が第一だ。お主もちつとやはらを稽古しやれ。先づ逃ける時とんだ身が軽くて佳え。」（春俗）

新身

或者新身の刀をと、のへ、友だちを誘引ひ、「今夜此刀を試して見よう。皆も来て見給へ。」と人離れな處へ出かけ、とある橋際にて臥したる非人を見つ、月かけに透して、「よく太つた奴、さあ彼奴を斬つて見せう。」と、すらりと抜いてちやうど切付け、かけぬけて一處にかたまり、「なんの逃げすとも可いに。」

そして如何だ、斬れたか。」といへば、「を、手ごたへして橋桁まで切付けた。」といふ。「さあそんなら行つて見て來う。」と引返して橋際へ歸り、非人の前後に立廻れば、非人むくくと起上り、「又打ちにうせたか。」（聞上手）

拔刀

「此頃毎夜あの片側町で拔身を振廻し、人を脅しまする。」『はてな、それは人の妨げにもなり危い事。いざ、我らが参つて見よう。』と、襷股立取敢ず行つて見れば、人の言ふに違はず、大刀振廻し、「なで斬りだぞく。」といふ。扱こそと身がまへして、ぢりくくと傍近く寄れば、かの者「なで斬り。」と云ひつ、透し見て、「侍には構はぬ。」（仕方咄）

武 勇

劍術の師の處へ皆寄つて、「近頃此村はづれに悪者が出て往來を剝いで取る由專の噂でござる。此間もさる武士が剝がれましたとたしかな咄、かの追剝め大手しやでござるけな。」と云へば、先生聞いて、「それは人の説でござらう。誠に居るにも致せ、剝がれたといふ侍は腰拔と申すもの。今宵は拙者が参つて試して見ませう。各の内二三人一處にござれ。」と同道して、かの噂のある松原へ行き、「皆は爰に待つてござれ。拙者一人参つて見届けて來ませう。」と勢込んで行きしが、間も無く眞裸になつて歸る。弟子ども驚き、「先生、これは。」といへば、師匠殿小聲になり、「まだ居たはい。」（聞上手）

手 紙

國へ手紙を遣りたく思へども書く事かなはず、近處の心安い處へ行き、「御無心ながらどうぞ手紙の古いのがあるなら、一通下さりませ。」何にする。「ん、聞けば、國へ遣りたうござります。」（花之家抄）

砂 糖

「砂糖といふ物は元が唐の砂ぢや。
 「を、聞えたが甘みは何で附ける。
 「やつぱり砂糖で附ける。」（漸の安賣）

金

「一分の金をへがして二分にする傳を受けた。」

「それは重寶なことだ。俺も一分出さうから、どうぞ二分にしてくれな。」

「をい、直になる事だ。併し断つて置くことがある。」

「何だ。」

「後で使はれぬによ。〔千里の翅〕」

一の富

ワキ「札料三匁で一番が百兩といふ富がある。あれを取るといふと、きつい

もんだ。

シテ「取つた者は可からうが、親元はさぞ損をするだらう。」

ワキ「なに、損のいく事をするもんだ。親元の損といふは無い圖だ。」

シテ「それでも危いもんだ。」

ワキ「何故、まづ金を先へ取つて置いて跡で突くものを、損のいく理窟は無い。」

シテ「いや、先づ札数が何千何百枚とあるでは無いか。その何千何百人といふ

奴がみんな一番に中つて見やれどうしたもんだらう。〔くゝり猿〕」

眼鏡

「眼鏡を懸けると眼が悪くならぬといふから、一つ買った。見てくりやれ。」

「どれ、見せや。先づ幾許で買った。」

「俺あ安く買った気だ。たつた二十四文さ。」

「それは安いもんだ。是は手前輪ばかりで肝腎のびいどろが無い。」

「そこが俺が思付き。びいどろが有ると、ほんぼりとして遠くの物が見えないから、それで返した。『くゝり猿』」

富士山

床の間の掛物を見て、「ははあ、探幽、書いたりく。私は此間富士へ参りましたが、とんと此通りでござります。」亭主「なんと、あの山の上からは私が見えませうね。」客「めつさうな。どうしてあの山から爰が見えるもの

か。」「はてな、見える筈だが。私どもの物干から富士は善く見えますが。

〔みになる金〕

唐の雀

唐の雀を献上するに一羽足らぬ故、日本の雀を交せて上げた。殿様御覽なされ、「これは珍しいものぢやが、日本の雀が一羽見える。」と御意なさるゝと、雀「はい、私は通辭でござります。〔今歳花時〕」

底拔

山の手を三人連にて行くに、一人が酒に酔つて如何もならず、そして「船に

乗らうく。』と云うて歩行かぬ。一人が思付で、輿を船だどだまして、輿舁『ぎちやこく。おも舵とり舵。』と云つて行く間に、やがて三町程も行くと、輿の底がずどんと脱けければ、生酔ぬからぬ顔で『ずぶくずぶく。』

〔今歳花時〕

つづみ

春の夜の静なるに、月の光さやけく、談の友も無ければ、獨り床柱に凭り、『されども此人。』と中音に諺ひかくれば、暫くすると障子越にぼんくくとえならぬ鼓の音、不思議に思ひながら絶えず諺へば、鼓もますく圖に乗つて打つ。段々面白さに田村を高聲に諺ひ出してせめに掛り『雨あられと降りか、つ

て。』『やあはあ、すぼぼん、ぼんく。』と、互に張合うて餘念無かりしが、いつの間にかとんと鼓を打止んだから、不思議に思ひ、そつと障子を明けて見たれば、狸が腹を打破り、『ひい。』〔今歳花時〕

* 三輪の諺のクセの出の文句。

** 田村の諺のキリの中の文句。

爺と婆

爺は山へ柴刈に婆は内で洗濯も何もせず居たれば、程無く爺が歸つて来たを見れば、二十四五の男になつて居る。婆肝をつぶし、『此方は如何して其様に若くならしつた。』『されば有難い事ぢや。あれ、あの山越えて此山越えて、あ

ちらのく瀧の水を一口呑むと、此様に若やいだ。此方も行って呑んでお來やれ。』と云へば、婆も喜んでへこくして行かれたが、途方も無く間が入るので、爺が後から行って見たれば、婆は慾どしく呑んださうで、瀧壺の端で「おぎやあく」。〔今歳花時〕

江戸時代笑話選 終

大正八年十二月十日
大正八年十二月十三日
大正八年十二月十八日

印刷發行
再版印刷發行

【江戸時代笑話選】

價金壹圓

著作權所有



發行所

東京市麴町區麴町三ノ二
振替口座東京一〇八六番

日本書院

編者 和田萬吉

東京市麴町區麴町三丁目二番地

發行者 福田滋次郎

東京市小石川區西江戸川町二十一番地

印刷者 高倉櫻

東京市小石川區西江戸川町二十一番地

印刷所 東京印刷製本株式會社

目 書 評 好 院 書 本 日

和田博士	同	村上浪六	漱石雪嶺其外	生方敏郎	同	同	芳賀博士	澤柳博士	大隈侯爵	仲小路廉	佐久間信吉
諧謔世界小話	和英文西洋小話	浪六皮肉文集	九大文豪皮肉と警語	一圓札と猫	玉手箱を開くまで	人のアラ世間のアラ	筆にまかせて	これからの人間	縦談横語	新舊一新	新譯狂言記
四版	新刊	廿四版	九版	九版	五版	八版	五版	八版	四版	六版	新刊
價一、八〇〇	一、二〇〇	一、五〇〇	一、五〇〇	一、五〇〇	一、五〇〇	一、二〇〇	一、七〇〇	一、〇〇〇	一、五〇〇	一、五〇〇	一、二〇〇
送料八	六	八	八	八	八	六	八	六	八	八	六

終

